俳　句　雑　誌

水　明

2020　2月号

令和二年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第二号

《今月のかな女》

洗濯しつゝ蕗の薹二つ見つけゝり

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

最初から最後まで、すべて自動で仕上げる今では、想像できない昔の洗濯風景である。木の盥に突っ込んだ洗濯板に、石鹸をつけた衣類を擦りつけて洗う。すべて手洗い手絞りであった。

庭先での洗濯で、目を転じた先に頭を出していた蕗の薹。現代では到底味わうことのできない往時の歓びである。

（鬼之介・註）

水　明

第1073号

―華の一句―

蕪汁よくぞ若狭に生まれけり

宇田白鷺

若狭水明会の飛永鼓（本名・悦子）さんが、苦心を重ねて昔の名産品「山内かぶら」を見事に復活させてから既に二五年余の歳月が経った。その独特の風味と食感が多くの人の心を掴み、京都・大阪・名古屋・東京などの大都市をはじめ、全国的に販路を広げた。掲句は、名物蕪の味噌汁を堪能した作者が、このブランド蕪が、そして、生みの親の鼓さんが、さらに、自分が、若狭の地に生を享けたことへの歓びの気持を詠んだものである。

（鬼之介推薦）

水明

令和２年

２月号

華の一句　山本鬼之介　4
箱の中（作品）　波多野寿子　6
椿（近詠）　矢作水尾　7
真鶴半島（近詠）　境延昭　8
冠木門　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評

※主宰作品の鑑賞

季音「雪」（同人作品）　吉住光弥　石井喜恵　網野月を　ほか　12
季音「月」（同人作品）　柚木治子　小倉倭子　宇田白鷺　ほか　19
季音「花」（同人作品）　松宮保人　矢島清　梅澤佐江　ほか　24

「水明」年間作品回顧

華の点描　石井喜恵　32
拈華微笑　大橋廸代　34
五つ星　菊池ひろこ　36
四季のこゑ　椎野美代子　38
春華秋実　島津初花　40
一陽来復　霜中冬至　42
五色の天衣　柚木治子　44

鼓笛集（同人作品）・私の一句　66
現代俳句鑑賞　網野　月を　28

水明集　野田　静香　大塚　茂子　日高　徹　ほか　46

水明集作品評　山本鬼之介　60
水琴窟（水明集十二月号鑑賞）　池田　雅夫　64
俳誌望見　梅澤　佐江　30
句集喝采　近藤　徹平　69
水明の記事掲載他誌転載　80
水明例会報・各地句会報　70・73
九十周年のご案内　78
新珠賞作品募集　82
春の吟行会・水明忌のお知らせ　83・81
風声・発展基金御礼　84・85
後記　86

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

箱の中

山本鬼之介

奉る京は「染井」の若水を

混血の少女に贈る冬のばら

市ヶ谷のとある屋敷の歌留多会

小鼓を締むる弓手も寒稽古

一月や蒔絵の箱に夜叉の面

反物を転がす人よ久女の忌

帯の鳴る着付け教室春近し

探梅や心の奥の秘境まで

椿

波多野　寿子

娘と居れば日差しはやさし紅椿

二月の忌夜目にもさやか白椿

姫椿ころころころとコロラチュラ

雲は天女に羽衣椿咲きにけり

雀来て枝にさやぐや藪椿

琴線にひびくトレモロ落椿

落椿打てど点さぬ石灯籠

毎月二月が来ると、「二月の忌」長谷川秋子先生と、山本嵯迷先生を思い出しています。美貌の閨秀作家、俳人として、世に知られた秋子先生は、心も美しく誰からも、愛されていました。山本嵯迷先生は端麗でおやさしく秀でた先生でした。

秋子先生は椿がお好きでした。

〝禁じられしことみな為たき椿の夜〟　秋子

我が家の庭には、いつの間にか、乙女椿、羽衣椿と、七本の椿が、花を咲かせます。

真鶴半島

矢作水尾

鰯雲鯖雲空を満たしけり

蒼天に紅葉の半島晶子の碑

思ひ出をまなうらに秘め散紅葉

光り合ふ椎の実拾ふ御料林

海は紺冬の到来岬に立つ

流木の焚火のあとを波洗ふ

冬涛にときどき消えて漁の舟

墓参りをかねて帰郷した。墓参のあと本堂へお参りする。本堂には、かな女先生と七十年前に句座を共にした皆さんの軸が飾られていて「お待ちしていましたよ」と迎えられた心地がした。

川口から来ると海に寄りたい。そこで足を延ばして半島へ。半島に立つ晶子の碑を眺めつつ、椎の落葉を拾う。それからかな女先生との吟行の思い出の岬に下る。晶子の碑の「伊豆の白波」の夕映を満喫し、半島を後にした。海は秋から初冬へ移ろうとしていた。

冠木門

◎主宰作品の鑑賞

境　延昭

十一月号

掌の準備体操さやけしや

一見不思議に思う。何のため、掌の体操とは。水明主宰として大量の原稿を抱え、決して締切に遅れることの無い作者である。パソコン派の作者が書斎のキーボードに向かう時の一種の通過儀礼なのであろう。季語「さやけし」により作者の朝の爽快な気分が伝わってくる。

末尾の「や」、詠嘆であって微妙に上五に掛ってくる。

砥石の音つづく無月の一軒家

不気味な景である。砥石は荒砥、中砥、仕上げ砥と次第に肌理が細かくなる。無月の夜に刃物を研ぐ一軒家は何者の住まいであろうか。音で言えば荒砥ほど大きい筈だが景の不気味さには肌理の細かい砥石の音の方が凄味が加わる。芝居に造詣の深い作者ならではの舞台装置である。さて、この後何が展開されるのかミステリアスである。

行きつけの来来軒の秋灯

全く衒いの無い肩の力の抜けた詠みっぷりに親しみを覚える。浦和で日頃句会を共にする者には「ああ、あの…」と思い至るのだが普遍性のある店の名ではある。支那そばと呼んだ頃のラーメン屋、座れば間をおかずビールと餃子の皿が出る居酒屋など読み手は勝手にその店を思い浮かべれば良い。決して高級の中華料理店に思いが及ばないのが良く、そこに人の温もりが感じられる。

散り初むる萩を片方の冠木門

冠木門は左右の門柱に横木（冠木）を渡した門で元は下級武士の家に始まったと言われるが大名家の外門などにも用いられた。映画や芝居では関所の場面でよく目にする。大宮氷川神社の社務所の道を挟んだ反対側に勅使館があり、その黒塗りの門がそれである。質素ではあるが門本来の様式美を備えている。

冠木門の片方に萩の花が散り始めた景であるが、冠木門の様式美に相応しい端正な句の仕上がりである。

車内化粧の一部始終を秋あはれ

車内化粧は当初年端も行かぬ娘の行為で、年配者は不作法で慎みが無いと思ったものであった。最近はその年配者にまで伝播の様である。この句は助詞「を」が決め手。俳句は省略の文学、助詞の一字が多くを語る。車内化粧の一部始終を

見てしまった作者の自戒の念と読む。

十二月号

千年や「染井」に今も秋の水

「染井」は古くから京都三名水に数えられた。他の二つは既に涸れたが染井の井戸は千年を経て今も湧き続けている。京都御苑の東に隣接する梨木神社の境内に存在。現役時代大阪勤務の経験があり、京都をよく知る作者ならではの句である。この神社は萩でも知られている。横に並べられた「ミッションの生徒の靴にこぼれ萩」は同じ場所で同時に詠まれたのであろう。

瀧行の褌つかれ冷まじや

褌は日本の男特有のもの。「褌締め直して」は企業戦士の頃の決め言葉であった。「越中褌」は戦中派までの常用の下穿き、「六尺」は若かった頃の水着であった。滝行の際の褌は晒の六尺であろう。その生地のつかれに行の厳しさが察せられる。英彦山あるいは御岳山だったか、ハイキングの折に偶然滝行を目にしたことがある。「冷まじ」は「冷やか」を越える凄まじい冷たさで、荒涼感や凄然感を含むとある。信仰心など全く持ち合わせない筆者でも凛然とした神々しさを感じたのを思い出す。

晩秋の夕陽あまねく水車小屋

秋の終りの頃、水明の仲間で信州を訪ねた。その折に安曇野の「大王わさび農場」で詠まれたものである。水車小屋が三つ並び、細い流れの中で古い水車が回っていた。筆者はその僅かな水量で動く水車が不思議で、係員に電動仕掛けであるのを確かめていた。全く下司の勘繰りでこれでは詩情は湧かない。詮索や変な勘繰りはそこそこに大景を詠むことを教えられた。

紅葉かつ散る宿(しゅく)や彼の日の和宮

十四歳で第十四代将軍徳川家茂に降嫁した和宮。替え玉登場の有吉佐和子の小説「和宮様御留」がベストセラーになったが、身代わりの三人の若い娘を駕籠で同道させたとの説もある。有栖川熾仁親王との婚約を破棄しての降嫁、その後親王は東征大総督として江戸に入る。幕末の実話を下敷きに詠む。宿は下諏訪「聴泉閣かめや」か、和宮所縁の上段の間が残る。「彼の日」が筆者には謎として残る。

和宮が詠んだ「落ちて行く身をしりながらもみぢばの人なつかしくこがれこそすれ」が作者の胸中にあるのは確か。この歌が下諏訪で詠まれたとすれば疑問が解けるのだが確かめる術を知らない。或いは下諏訪でなく別にこの和歌を詠んだ宿が在るのかも知れない。特定することが出来ずとも構わない。和宮が生きた時代の壮大なドラマを彷彿とさせてくれる句である。

硯箱

◆季音十二月

井口俊晴

稲雀散つて光りの礫かな　石井　喜恵

豊の秋。黄金色に実った稲に雀が群がる。雀たちは人が近づくとぱあっと散って逃げていく。秋の日を浴び、その様子は光の礫を見るようだ。田んぼのあちこちには案山子が立っているが、雀たちには効き目がないようだ。日本の原風景を見る思いがする。

踏みしだく窯の陶片秋の声　境　延昭

ＮＨＫの朝ドラ「スカーレット」はヒロインがいよいよ陶芸家への道を踏み出した。ドラマの舞台となっている信楽は、古くから備前、丹波などと並ぶ古窯の里だ。窯に火を入れて何昼夜、窯から出された皿や鉢で、陶工の意に染まぬ出来だと、その場で砕かれてしまう。窯の前にはそんな破片が散乱している。足元の硬い陶片を踏みしめながら見上げると、赤く熟した柿の実がたわわに実をつけていた。

見慣れたる港消したる朝の霧　矢作　水尾

伊豆の漁港であろうか。旅館の下駄をつっかけて朝湿りの砂浜に降りると、あたり一面が真っ白な霧の海である。時おり鷗の鳴く声が聞こえてくるが、その姿を見ることは出来ない。見慣れている漁船さえ、まるで影のようで判然としない。あたかも魔法の世界に迷い込んでしまったように立ち尽くす作者である。

草の実を纏ふ迷子の子猫抱く　高島　寛治

「まいごのまいごのこねこちゃん」という童謡を思い出してしまった。犬のおまわりさんが迷子の子猫にお家を尋ねるが、子猫はただ泣くばかり。優しい作者は子猫を抱き上げて保護した。草むらを彷徨っていたのだろう。草の実が体中に付いて取るのが一苦労だ。子猫の幸せを祈ろう。

残暑なほ雄鶏胸を反らせをり　町野　広子

立秋がとっくに過ぎたというのに、暑さは一向に収まる気配がない。人はもちろんのこと、犬や猫さえぐったりしているようだ。そんな中で、マッチョな庭の雄鶏だけは元気いっぱい、コケコッコーと胸を反らせて歩き回っている。どこかユーモラスな庭の光景である。

蓑虫やガラスビル拭く命綱　　川崎　道子

最近の高層ビルは窓が大きく、全面ガラス張りであるかのような美しい外観のものが多い。晴れた朝などは日光を反射し、まるで氷の城みたいに見える。その代わりメンテナンスが大変だ。作業員は屋上から命綱のロープにぶら下がり、窓のガラスを拭いていく。その様子は風に揺れる蓑虫のように頼りなげである。

新米や少し古びし夫婦箸　　荒井　倶子

子供たちもとうに巣立ち、夫婦二人だけで囲む食卓。お茶碗もお箸もちょっぴり古くなってきた。でも炊き立ての新米を口に運ぶ時は、何となく心華やぐものだ。お箸の塗りが少しだけ剥げているのは、二人の年月の証しみたいで、安らぎさえ感じる。いつまでも仲睦まじい二人である。

柏手のきれいに二つ妻の秋　　原田　想子

かしわでを神前で打つ。神社にお参りする時の作法であるが、まあ、かなりいい加減な人も多い。私なんかもその部類だが、本当は「二礼二拍手一拝」と言って、最後のお辞儀は深々としなければいけないそうだ。秋晴れの神社の境内、かしわでの音があたりの澄んだ空気を震わせた。「きれいに二つ」がとてもよい。

冷まじや今も堅固な穴太積み　　福田　千春

「あのうづみ」と読む。大きな石に小さな石を点在させながら、バランスよく石垣を積み上げる技術だそうだ。戦国の昔から、難攻不落を誇った、いわゆる名城と呼ばれる城には、みな穴太積みの技が生かされている。兵どもの夢の跡を夜半の月が煌々と照らしている。

街の灯の消えて始まる虫時雨
鳴く虫に闇の深さを計りけり　　故加藤草太郎

家々の明かりが消え、人々が寝静まった頃、秋の虫たちの合唱が始まる。一人眠られぬまま虫時雨を聞く作者には、夜の闇の深さがいやがうえにも感じられる。誰にでも親切だった草太郎さん、ご冥福をお祈り致します。合掌

季音雪

一人の餉　　吉住光弥

葛湯飲む胸の閊へのとれるまで
葱(き)ばかま裂くひかりの肌は刃を拒み
葱一本の味を頼りに一人の餉
猫の居場所決まり炬燵と云ふところ
手袋ふりし特攻(とっこう)機といふ別れ

笑つてしまへ　　網野月を

風花ややぶのおかめを熱いうち
一本余し相合傘を夕時雨
初霜や西郷さんに鳩の糞
タコ焼やちょつと歪な冬の月
目薬を点す手震へる野水仙

冬の路地　石井喜恵

野良猫の意地の一瞥冬の路地
北風や衣一片を裸婦像に
運を買ふ列のしんがり冬の空
手袋にさよならの指仕舞ひけり
茶の花や半音低き子守唄

近松忌　石山かつ子

雪国の待合室の掘炬燵
畳屋の寺に来てゐる冬至かな
心中したき者も居らねど近松忌
近松忌奥の間といふ開かずの間
茶の花や駆け込み寺に人絶えて

榾の主　大橋廸代

御座船の水脈はむらさき小六月
天神の牛の目真つ赤落葉焚
待たされて待たされて京の蕪蒸
冬満月のしぶきを頬に投函す
ぽん引きの過去をさばさば榾の主

冬の朝　大村節代

先導はツシマヤマネコ冬の朝
どの路地にも闇のかぶさる冬の朝
つまづきし小石蹴飛ばす冬の朝
手と足のてんでに揺るる冬の朝
五体満足どこかが歪む冬の朝

酉の市　栢尾さく子

マスクして遠い火の手に目を凝らす
ふんぎりのつきて襖を締めにけり
冬ばら一輪切羽詰まりし真紅かな
欲しがらぬ顔して値切る酉の市
暗がりに足焙りをり酉の市

不忍の水　菊池ひろこ

不忍の水の残照牡蠣啜る
飾り柄のフォークを武器に牡蠣の卓
垂直なものに枯蘆鳥の脚
冬月の軌跡を追ふも旅の窓
炉明かりに一期一会の手をかざす

旅人　小林萬二郎

漂うて雲は旅人冬椿
寒鰤や予て用意の大漁旗
沖波の荒み齎す鰤大漁
大衆の心をつかむ鯛焼くん
蒲団の肩直して寝まる親心

暮色　五明昇

暮早し上がり框で足す用事
山茶花をよよと泣かせる夕嵐
叡山の影の余白に浮寝鳥
矍鑠と男坂行く冬帽子
じやじや馬の瞳潤ます玉子酒

銀座の灯　境延昭

襟巻の浅葱の裏地銀座の灯
冬柳銀座に古きマンホール
くず湯吹き異存なぞ無き女帝論
山茶花の散るや戦没慰霊の碑
弔の袱紗の横のミトンかな

しがみつく　椎野美代子

皮手袋脱がんとすればしがみつく
あづかりし革手袋の火薬臭
バックスキンの赤い手袋助手席や
遺されし手袋の五指語りたる
胸裡の時計は昭和手袋編む

虎落笛　島津初花

葉牡丹や家紋のごとく座らせる
葉牡丹の渦が巻き込む日の光
立冬や托鉢僧の美声伸ぶ
鳥羽谷の縄手三本虎落笛
榛の木の貧しき田道虎落笛

浮寝鳥　鈴木康世

指で触れ固さ確かむ冬木の芽
冬の薔薇色を深めて咲ききれず
散りぢりにゐて一陣の浮寝鳥
逆さ富士を褥にしたる浮寝鳥
寝そびれてモーツァルト聴く夜半の冬

十二月　永野史代

屋台のおでんぽつりぽつりと愚痴こぼす
店屋物とて鍋焼に舌焦がす
河豚運ぶふくれつ面の仲居かな
不完全燃焼のわたくしの焚火
十二月八日のポインセチアは白を買ふ

あるがまま　西山貴美子

あるがままに生きて転んで酉の市
アスリートの熊手に心ときめきぬ
残り物の菜の際やかに鍋雑炊
韮雑炊匠の顔が向ひ座に
迷ひ神にひと言もらふ襖越し

冬座敷　波多野寿子

幾面の琴立てかけて冬座敷
冬座敷古ぶ緞子の琴袋
さざん花や朱塗り確かな譜面台
音曲は手ごとに入りぬ花やつで
正座して琴柱はづすや冬ぬくし

浮寝鳥　服部みどり

浮寝鳥山借景のそば処
浮寝鳥石垣づたひにつういつい
渡し舟竿奪はれて浮寝鳥
水よりも深く昏れをり浮寝鳥
いづこより森の式典浮寝鳥

積ん読　星野和葉

ひととせを風に委せて冬至粥
一陽来復積ん読の本の嵩
調剤の薬は合はず虎落笛
鍵一つ掛け忘れたか虎落笛
改札出で聖樹の森に紛れ込む

陽射し　茂木和子

山茶花の垣根越しなる猫談義
狡猾な猫の瞑想白さざんか
冬麗に透く桃色の猫の耳
冬暖や猫一瞥の犬潜り
黒塀の冬日に欠伸烏猫

鞴祭　矢作水尾

相鎚と意気合ふ火花鍛冶祭
鋳物師か鞴清めて鍛冶祭
開け放つ鞴祭の火の青く
表札の名の代はりけり花八ッ手
天日のほかは動かず枯柳

近松忌　山中順子

泣きぼくろ涙でかくす近松忌
昼三ヶ月風に尖（とんが）り近松忌
コンビニのコーヒーと冬の時刻表
木偶が抱く木偶も泣きをり冬柳
初時雨おひとりさまの白ワイン

冬薔薇　山中　みどり

初霜やカチリと止るオルゴール
初霜の夜は紅茶にブランデー
北向きの刀剣博物館冬すみれ
つなぐ掌に通ふぬくもり冬灯
冬薔薇忘却てふ幸もあり

埋み火　由良　ゆら女

電飾の骨しらじらと冬の蠅
容赦なく押さるる背や年の暮
冬薔薇八十路を凛とアダモかな
餅搗きの音の気合ひを小半時
埋み火や聖者は音を消してくる

（順送り）

最近の名句集を探る【座談会】
中嶋憲武『祝日たちのために』
藤永貴之『椎拾ふ』
生駒大祐『水界園丁』
〔司会〕筑紫磐井　齋藤愼爾　榮猿丸　宮本佳世乃

高橋睦郎 特別作品40句

追悼・伊丹三樹彦

◉巻頭三句
高野ムツオ
片山由美子
豊長みのる
中久保白露
山本つぼみ
谷中隆子

◉今月の華
山本鬼之介
黒滝志麻子

◉その時、俳句手帳
今井　聖

◉俳句と短歌の10作競詠
ながさく清江
安藤昭司

◉好評連載
網中いづる　SEASONAL KALEIDOSCOPE
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
藤村公洋　俳句のつまみ
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2020年2月号
1月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

古文書　柚木治子

シャム猫を抱き出迎ふる冬館
古文書の紙の音して蓮枯るる
画布となる朝靄に泛く寒椿
迷ひ込む粋な路地裏寒椿
炎色は鳥を惹きつけ寒椿

名古屋饂飩　宇田白鷺

畝深し母のたがやす葱ばたけ
昨日見て今朝また蕪畑かな
蕪汁よくぞ若狭に生まれけり
笑む妻に名古屋饂飩や十二月
湯上りの空見て寝る冬至かな

道標　小倉倭子

さめざめと舞台の男近松忌
近松忌愛の結末浄土へと
道しるべなき径行くや枯柳
枯柳風に抗ふ術もなし
彫塑展出で柳の枯るる六本木

ピアス揺れ　松本光子

江戸菊や路地に聞こゆる山中節
男坂下れば神田年の市
上げ髪にピアス揺らして熊手売り
アルバムの父の眉濃し十二月八日
着ぶくれてほめあふ友よクラス会

虎落笛　森本早苗

冬紅葉嵐峡に浮く屋形船
小夜更けて面影偲ぶ虎落笛
若冲の鶏の雄叫び散紅葉
手水鉢真紅の落葉アートかな
「コン」と一声木の葉咥へて姿消す

遠会釈　丸山マスミ

裏木戸に石蕗の明かりの昏れ残る
干蒲団負けし無念も叩き出す
禅林の作務の小昼の葛湯かな
お多福が迫り出す勢ひ熊手市
茶の花咲く作務の尼僧に遠会釈

初句会　鳥羽和風

姫の碑に松の雫や初句会
初句会五湖全貌の方位盤
新鮮なねたを仕込みて初句会
初句会でつちやうかんつるんと吸ふ
大吉の札捨て切れず初句会

浮寝鳥　森田祥絵

声嗄れの鴉飛び立つ枯野原
水鳥の珠ともなりし浮寝かな
忘却の文字散り散りに浮寝鳥
冬紅葉引き手の重き離れ茶屋
木枯や畝の青菜の寸足らず

年の名残　井関礼子

棲み古りて裏山よりの虎落笛
門先の柊共に半生を
酒蔵の門引き締むる冬桜
代り映え無きを佳しとし木の葉髪
遊び事に老を忘るる年忘れ

枯蓮　川崎道子

枯はちす仮名散らすごと入り乱れ
枯蓮や検査を受くる骨密度
城の案内は紙の甲冑帰り花
銀杏黄葉大道芸に硬貨投ぐ
煤払ひふとした仕種父に似る

石蕗の花　加藤むら子

陽を浴びて庭の一角石蕗の花
近道をして枯草に阻まるる
過ぎし日を悔やみても無駄年の暮
冬の雨寡黙の一日暮れにけり
裏庭に綿虫舞ひて留守頼む

威儀を正して　池田雅夫

巨樹の影抜き落したる初日かな
波音のかくも穏やか宝船
初鏡威儀を正して人に会ふ
人日や体重計に恐るおそる
初志すでに挫けさうなり寒に入る

牡蠣割女　荒井倶子

遠景に富士近景にかいつぶり
会へばすぐハグする女冬帽子
血糖値ころりと忘れ玉子酒
たまご酒尖りし心丸くなり
牡蠣割女男をふつた話など

初雪　藤澤喜久

初雪や音なく積もるノスタルジア
枇杷咲いてはたちの晴着届きけり
ハチ公前待ち人多き降誕祭
見透かさる黒いショールのむなづもり
てつちりの地酒に呑まれ泣き上戸

棚田　町野広子

狼煙めく峡の棚田の焚火かな
焚火囲む炎の向こう側に兄
一斗罐より炎食み出す焚火かな
暮早し塾明明と灯りたり
犬引いて行く昼下り花八手

冬ざれ　田寺玲子

異人館巡る急坂風花す
居留地の落葉踏みゆくハイヒール
枯蔦のからむ居留地五番館
短日やランタン灯る中華街
繋船のロープの軋み冬ざるる

秘めたるは　渡辺舎人

ボロ市や「凡石」ごろごろ百の富士
シクラメン秘めたる言を咲かせける
連れ合ひめくゆるき歩列や酉の市
一味づつ啖呵七色の唐辛子
金銀の光ゲ万遍の熊手市

冬椿　高島寛治

小春日や達者で暮せと母の文
母子寮に陽を溜めて咲く冬椿
吊革に手袋並びファッションショー
蒲団干す心配事は特に無く
軍場の跡みる如し枯蓮

障子　十倉和子

障子明りに紫匂ふ尼門跡
鳥声を聴き分けてゐる白障子
鯉悠悠光のうごく白障子
山は雪ほつこり灯す古障子
障子閉むる引きこもりの顔見てしまふ

鴨の陣　伊藤敦子

羽搏いて未だ整はず鴨の陣
大根の穴寒いさむいと声がする
落款の朱肉の匂ひ都鳥
懐手して流星群の尾を数ふ
提げ帰る玄関灯すシクラメン

木の葉髪　川野妙子

占ひの吉と出る日の木の葉髪
木の葉髪女三人立ち話
聖菓剪る背に歓声の響きけり
美しくしなやかに舞ふスケーター
忘却もまたよきかなと大根煮る

年暮るる　井上燈女

年暮れて日記の余白句でうむる
容赦なく身を吹きぬくる空つ風
葱の里「栄一」生家のどんと建つ
煮ばうたうのとろりと甘き母の味
ショートケーキ仏にも買ふクリスマス

霜柱　内田恵子

霜柱骨粗鬆症のクスリ飲む
守衛ゐる安田講堂銀杏黄葉
着飾るも背丸き女十二月
音読の急に間遠に炬燵の子
炬燵の上に「巌窟王」と「噫無情」

日記果つ　霜中冬至

もらひものポインセチアの置きどころ
私は曹洞宗でもポインセチア
鳥羽谷の在所の入口虎落笛
平成から令和元年日記果つ
大くさめあとあじのよき具合かな

酉の市　岡野順子

地下鉄出でひと人人よ一の酉
小熊手持つ子供抱かれて神妙に
大熊手意気揚揚と掲げゐる
雑炊や出しが要と頑張りぬ
雑炊や長寿の眉の湿りかな

☆

☆

第三十四回俳壇賞決定発表
選考座談会　井上弘美・佐怒賀正美・鳥居真里子・星野高士
◎巻頭作品10句
合谷美智子・大久保白村・柴崎甲武信
清水道子・友岡子郷・檜　紀代
岬　雪夫・村上喜代子

俳壇
2月号
1月14日発売
定価900円(税込)
巻頭エッセイ
坂本宮尾
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅱ期］…大島雄作・奥名春江

新連載
わが俳句道・わが金言（モット）……大輪靖宏
先人のことば……今瀬剛一
超結社の会へようこそ……豆の木

連載
続・日本の樹木十二選……広渡敬雄
俳壇史エピソード……坂口昌弘
季語への供物……井上弘美
俳壇時評……坪内稔典／俳壇月評……長嶺千晶
俳句と随想12か月　野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル　電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

季音花

年用意　松宮保人

葱刻む妻にリズムのある朝餉
葱の青一直線の畝に立つ
掛け替へし樋の奏づる虎落笛
荒縄の男結びや年用意
産土を隈なく掃きて年用意

比翼塚　梅澤佐江

漆黒の闇を動かす鰤起し
口八丁手八丁の牡蠣割女
枯柳歴史を秘むる高瀬川
障子明りに備後表の香りかな
近松忌師の菩提寺に比翼塚

冬の坂　矢島清

自動ドア開き枯葉が先に入る
冬の坂卒倒したる影つれて
葬儀屋に耳打さるる寒さかな
障子閉め空気ふたつに分かれけり
曲屋の山羊が見てゐる霜柱

息白し　大場順子

木枯やもう削るまじ武甲山
吹かれてはパントマイムの枯蓮
手袋を脱がぬまま読む置手紙
同郷の念ひではづむおでん酒
膝に乗る猫の息まで白き朝

懐手　原田想子

旨み出せ風の恵みの干大根
山茶花の紅を崩して鳥あそぶ
裏山の竹に添ひ寝の寒椿
老いの部屋選ぶ太字の初暦
買物の妻をみてゐる懐手

冬の月

松井由紀子

脱ぎ捨てしセーター縋りつくかたち
四噸車木枯よりも疾く走り
歳の市果てて小さきつむじ風
石蕗の花つくばより来る箒売り
己が影踏めばしやりしやり冬の月

近松忌

山田美佐尾

それ故に二人は添へぬ近松忌
石蕗の花終りの見えぬ丹の鳥居
暮れ早し畳表の艶の良さ
初雪や新しき家祝ふかと
初雪やホームに立ちてシネマのやう

玉垣

森川義子

世話物に涙霞や近松忌
玉垣に夕日の美景冬の庭
肩ふるる物みな柔し冬木の芽
寒鰤や浜の女房活気づく
豆力士集ふ境内神無月

石蕗の花

野平美紗子

石蕗の花一家支へし母のこと
竜神の水をもらひて石蕗の花
初デートつひ紛れ込む酉の市
バス通り落葉に追はれ追ひ越され
雲割つて光もれ来る冬の原

月冴ゆる

井上玲子

月冴ゆる読経もれくる延暦寺
さえざえと胸中を研ぐ冬の月
冬の月今日の命の光汲む
枯葦の沼茫々と鷺一羽
張扇はつしはつしと冴ゆる夜

木の葉髪

野口和子

手袋を咥へて操作するスマホ
掘炬燵兄の定位置空きしまま
発電パネル無味乾燥に冬ざるる
裏腹な心と身体木の葉髪
今朝の空冬の満月そのままに

古炬燵　井口俊晴

金婚や今も現役古炬燵
プーさんの湯たんぽ抱いて夢の森
玉子酒魔法のやうに効く薬
焼芋の焦げ目が好きと犬の鼻
瀬戸内の夕日を浴びて牡蠣筏

山眠る　秋山冷子

鴛鴦遊ぶ沼虹色に染めあげて
返り花一輪今日の仏花とす
鳩尾にたぎるものあり冬木の芽
陽光はふんはり布団山眠る
かさつと音目覚めはじめる種袋

冬ぬくし　宮崎雅訓

登園のバスから振る手冬ぬくし
北風や黄帽子きちんと決まる列
冬朝練ボールは他所に中学生
高校生流行でもなし耳袋
電車内スマホにマスク大学生

師走　菅原知子

霜柱登校にあり下校には
牡蠣買うて友とワインと語らひと
鰭酒は魔法の酒か下戸酔はす
寄せ鍋の締めは讃岐の太うどん
令和元年師走十三日の金曜日

恋話　福田千春

鍋の牡蠣ちぢむ佳境の恋話
焼牡蠣の潮の青さをいただきぬ
菩提寺の厠は裏手霜柱
霜柱跳ねて潰して一年生
河豚刺しの大輪の花くづし食ふ

根深汁　松山清子

数へ日やぐいと縛りぬ古雑誌
数へ日やいつのまにやら指に傷
ガラスビルは発光体なり冬夕焼
猫舌は家系なるかも根深汁
蓮の骨足弱なるも万歩計

山茶花

西浦　千枝子

紙懐炉背中へ一つ登園す
冬紅葉発火しさうな吉野山
山茶花や退院の夜は魚づくし
白壁の一村化粧ふ散り銀杏
紅葉散る天下御免のカメラマン

冬桜

上戸　千津子

北国路軒の深さや吊り干菜
音に聞く八角塔や冬紅葉
高く低く風の呼吸か虎落笛
酒蔵の香にほんのりと冬桜
数へ日の仕事増えゆく理外の理

冬の海

中野　彊

木守柿我が家もしかと守りをり
岩に立つ釣り人一人冬の海
冬ざれの静かに下りる滑走路
シクラメン抱へ笑顔の庭師来る
電飾が街を拡げてクリスマス

☆

三陸海岸紀行

後藤　綾子

山眠る水禍の跡をつけしまま
赤土にさらす鉄骨小春空
語り部と見下ろす入江冬日燦
何事もなかりし如く冬の浪
三陸に響けとコーラス十二月

☆

現代俳句鑑賞

網野月を

東京といふ故郷に布団干す

（『俳句界』12月号・東京浄土Ⅱより）

森　潮

作者にとっての「故郷」とは「布団干す」ことに象徴される日常を取り戻すことの出来るところなのであろう。巨大都市である「東京」は文字通り首都であり、またビジネスの中心都市でもあり、家庭的な生活の場とは対極にある場として一般に受け容れられている。または無機質なイメージで扱われることも多い空間であるが、作者にとっては日常を保つところなのである。「……といふ……」の措辞は、常套的な表現に陥りがちだが、掲句には意外性が存在していて、言い回しにストレスを感じさせないでいる。他に「自転車に空気入れをり花八つ手」があり、軽いタッチで日常を叙している。

枯蓮の三角四角風の線

（『俳句界』12月号・特別な日より）

本郷　公子

「枯蓮」の作り出す三角形や四角形の景が眼前に見えるようだ。その図形に風という線が加線されているのである。不可視の線なのかも知れないが、確かに「風の線」が其処には在って、しかも三次元的に構成された「枯蓮」の図形に風という速さが加えられているのである。つまりこの景に時間が掛け合されて四次元的な把握になっているのだ。他に「銀杏散る造幣局の地下金庫」がある。

コンドルは翔ち冬帝の順路へと

（『俳句』12月号・地球との媒体より）

坊城　俊樹

「コンドル」を従わせる冬帝の存在を確認することで、自然の厳しさを詠んでいる。「コンドル」は鳥類の長を象徴しているようだ。作者は「順路」という不覚の目には見ることの出来ないものを見出して、そこへ「コンドル」を引き込んでいるのだ。添えられているエッセイからすると筆者の読みはずれているかも知れないのだが。

ハムの断面星河となりて動き出す

（『俳句』12月号・藪からしより）

高野ムツオ

この「ハムの断面」は古今東西唯一のものなのである。それは微細なものであり、芸術でも科学でもない。神話でも歴史でもない。人間の創り出したあらゆるものとは無縁の、人間世界とは反対側にあるものだ。その「ハムの断面」が「星河」になる。すべての事物が連携しているということである。これだけの飛躍は表現としては際どいところにあるかと筆者は考える。将にギリギリの一線に踏みとどまっている観があ

る。だからこそこの緊張感が演出できるのである。

「ハムの断面」が雁首だとすれば、「星河」は吸い口である。よく羅宇を手入れしていれば味わい深いものである。他に「宰丸二つ冬日が二つある如し」がある。

さて顔があつたかどうか外套過ぐ　山本　一歩

（『俳壇』12月号・外套より）

冬の幽霊話のようでもあり、惚けた感じもある。男性の一般的な性向としては着衣よりも顔を見覚えているものであるが、「外套」の印象だけが残像となったということは、余程強烈なコートの意匠であったのであろう。中七の疑問形の効果大である。

人は歩き木は立ちつくし八月来　兼城　雄

（『俳壇』12月号・兼城雄の俳句より）

上五中七の二つの動詞が現在完了形のように囁かれている。座五の季語「八月」の有しているイメージが多質、多量、多層であるだけに上五中七の句意を受けとめて充分である。座五の「……来」が上の二つの動詞と上手く符合している。

長き夜や宙になぞれる書の手本　河原地英武

（『俳句四季』12月号・雁渡しより）

書体を夢想しているのである。上五の季語「長き夜」を切れ字の「や」で強調している作法である。「長き夜」を持て余しているのではなくて、作者は「長き夜」を楽しんでいるのだろう。他に「立呑の魔女のカクテル秋落暉」がある。

新藁の青き匂ひや父系絶ゆ　大森　藍

（『俳句四季』12月号・夾竹桃より）

上五中七の句意と血統の理りとの取り合わせである。実に見事な取合せで中七の切れ字「や」もぴったりと一句に納まっている。上五の季語「新藁」の「匂ひ」は生々しい青臭さと共に日向の匂いも感じさせる。「新藁」はこの匂いも含んだ意味合いを有する季語であるのだが、座五の「父系絶ゆ」と取り合わされると「青き匂ひ」の重複感が返って丁寧な言い方に転化してくる。

「父系絶ゆ」については作者ご自身がご健在なのであるから、他家の事なのであろう。他に「終らないボレロ八月十五日」「慟哭の兄の影あり夾竹桃」「一睡のあとの青空ラ・フランス」がある。

花冷や刺繍おもたきチャイナ服　藤田　直子

（『秋麗季語別俳句集』・花冷より）

「秋麗」は令和元年十月に創刊十周年を迎えた結社で、その記念事業の一つとして「秋麗季語別俳句集」を編んだと「刊行によせて」にある。装丁は歳時記のように装丁されている。掲句は「秋麗」の主宰の作である。句意の展開と取合せ、季語の斡旋ともに、その格調の高さは結社を代表する作品である。

俳誌望見

梅澤　佐江

『くぢら』　令和元年一一月号　通巻九〇号
主宰　中尾公彦　発行所　東京都新宿区

平成二六年一一月、中尾公彦が東京で創刊。師系は能村登四郎、林翔。「心に響く言葉で心に届く俳句を」を理念とする。（月刊）

巻頭にくぢらの主眼が墨痕淋漓の主宰の直筆で掲げられており、結社の勢いを感じた。

主宰句「青いカナリア」一八句より

コンビナートの幾何学美しき夜涼の灯
渓流に火の色走り曼珠沙華
群れ飛びて独りと思ふ蜻蛉かな
書を曝す己が来し方晒しけり
軽やかな青いカナリア聴く素秋

一句目二句目、いづれも鋭い観察による感性豊かな描写。三句目四句目、自己への厳しい程の洞察。五句目、次第に解き放たれてゆく心に研ぎ澄まされた精神性をみる。

金鯨集　三名　各八句より一句ずつ紹介

夜も歩く母の秋思を計られず　掛井　広通
白芙蓉吹かれて白を極めけり　村岡　政子
新涼を追ふジョギングの脚の波　宮崎ひろし

太洋集　五名　各七句より　三名を一句ずつ紹介

荒川に沈むビル街秋燕　古屋　元
尾を振つて泳ぐ金魚の孤独かな　青野　勝子
花芒オンザロックの音聞きて　原　紀久

海鳴集　二〇名　各六句より　三名を一句ずつ紹介

黒葡萄いのちの色が脈動す　仲田　治久
あるがまま今を受け入れ花野ゆく　伊藤　康子
ジュピターの曲の流るる大花火　松本かつら

くぢら集　二〇名　各六句より　三名を一句ずつ紹介

ブティックの彩り変はる残暑かな　片居木一江
銀の砂夜空を飾る天の川　藤田　益弘
流鏑馬の馬の嘶き秋高し　麻生　紀子

自然と人間風詠を軸に、生きる証の俳句に全体重をかけ唯一無二の自分だけの生きる俳句を詠んでいる。

全会員四八名の句全て主宰選による一人一句ずつの秀句を「くぢら作品抄」として掲載し、うち一五句には更に「推薦句評」が添えられて全会員を鼓舞している。

工藤進氏の「現代俳句月評」60の奥深い鑑賞を堪能し、小西昭夫氏の「正岡子規便り」41は旧制松山高校出身俳人の句や裏話を愉しみつつ、60回、41回という継続の大切さを改めて感じたのである。

創刊以来、月に一度の吟行と年一度の吟行旅行も継続中で句集鑑賞、書評を通じ俳句と論評の充実をはかる結社の真摯な姿勢に触発された。

令和元年

年間作品回顧

期間

平成31年１月号
～令和元年12月号

華の点描

石井　喜恵

大橋　廸代

こともあらうに魔女の一撃大晦日
ふりむけば櫻に沈む天守閣

大晦日、除夜の鐘を聞きつつ一年を無事に過せた事に感謝しつつ安堵する。そんな日に作者の身に一体何事が、といろいろ想像が膨らむ。が魔女の一撃とはぎっくり腰のこととか。どうぞお大事に。〈櫻に沈む〉とは、満開の桜を詠んで美事な表現。天守閣との取合せは絶妙である。

闖入の蛇の始末を引きうける
蛇かかげ砲丸投げの助走かな

全国大会でお見掛けした作者は、笑顔の優しい柔和なお人柄と感じた。とても蛇をかかげて走る姿など想像できない。しかし、ここは突然の出来事、咄嗟に蛮勇を奮って斯くなる行動に。何と頼もしいことでしょう。

栢尾さく子

還らざる過去煙らせて落葉焚く
春寒や妓王を語り終へし琵琶

最近は見ることができなくなった焚火。思い出の詰まった手紙を、そっと落葉の中に忍ばせて焼くこともある。懐しい冬の原風景であった。二句目、京の白拍子であった妓王は、平清盛の寵を失って後、二十一歳の若さで尼となった。平家琵琶の中でも悲劇のヒロインとして語り継がれている。

激しさの己に出逢ふ雪解川
踝がさびし漢の白絣

時に獣のような唸り声を上げて流れ落ちる雪解川。沈着冷静、いつも毅然とした作者の胸奥の一端を垣間見る思いがする一句。折良く見掛けた男の人、何とも粋でお洒落なことといったらない。裾からちらと見える踝が艶めいているのだ。踵ではなく踝と云う所に作者の確かな目線がある。

服部みどり

大仏の少し猫背や冬隣
凍星の百カラットの夜会服

鎌倉にお住いの作者、長谷の高徳院の庭に露座するあの大仏様のことであろう。伏目がちの穏やかなお顔を拝すること

は幾度もあったが、猫背であるとは気付かなかった。
冬は大気が澄み凍星の光りは一段と鋭くなる。思いきってその煌きを百カラットと云ってみる。

ランドセルがくがく笑ふ一年生
案山子はや土間に寝かされ十三夜

一年生の小さい背中に、ランドセルは殊更大きく思える。がくがくとは正にぴったり、小走りで過ぎる下校時の様子が目に浮かぶ。収穫まで頑張ってくれた案山子よご苦労さま。近頃はユニークなものが殆どで、一本足のへのへのもへじに麦藁帽子というユーモラスな案山子にはお目に掛かれない。

鳥羽　和風

七草や母の遺影だけカラー
猫柳反り身豊かに夢二の絵

古くから正月七日の行事として、春の七草を粥に入れて食べる。万病を防ぎ一年の邪気を払うとされ、広く一般的に行われている。いつもなら母と共にこの新年を祝っていたのに。
竹下夢二の美人画は繊細で独得な情緒がある。黒猫を抱いた女性や、夕月を見上げている姿はなよやかで儚く美しい。

そよ風に影もふくらむ春の服
拝むや二百十日の神仏

心地良い春の風、踊るよな影を連れて何処に出掛けよう。
立春から数えて二百十日、九月一日頃は、丁度中稲（なかて）の開花期である。まさに台風の時季と重なって、農家にとっては厄日なのだ。どうか被害なきよう祈る思いである。

近藤　徹平

乗り手なき回転木馬寒戻る
キューポラの失せたる街を春霞

楽しいリズムに乗って廻る回転木馬。子ども達が幼い頃の記憶がふと甦る。だが今日は殊の外寒くて誰も乗っていない。早く暖かくなると良いなあ。キューポラの街川口。あれほど栄えた鋳物の町も霞の彼方に。すっかり街は便利に美しく生れ変り、住みたい街№1だと報じられている。だが昔を知る作者には一抹の淋しさが過ぎるのである。

秋灯下キープボトルの千社札
髪黒き旅券の写真秋のパリ

永く要職にあった作者の行きつけは、きっと落付いた雰囲気の高級なバーであったであろう。日本古来の千社札とのミスマッチが何とも楽しい。二句目、秋のパリはもう寒い。並木の美しいシャンゼリゼ通りを、肩寄せ合って歩いたあの頃は若かった。誰の胸の奥にもある郷愁あふれる一句。

拈華微笑

大橋　廸代

山中　順子

四つ折のメモ渡さるる朧の夜
性別の欄に「女」と初蛙
僧二人縫ふやうに来る木下闇

すれちがいざまに手渡されたメモが四つ折とは春の夜の情緒たっぷりな艶。最近お婆さんかと思えばお爺さんだったりその逆の場面に出会う。性別不詳の御仁が実に多い。〈初蛙〉が絶妙の諧謔をかもす。木下闇を来る二人の僧はまるで一幅の水墨画、静謐にして心に迫りくる風と光を伴って。

餌を運ぶ蟻の迷はぬ一本道
山坊の魚鼓の木霊や月の雨
秋の昼深まなざしの聖母像

〈迷はぬ一本道〉は順子さんの生き方そのものだと思う。激動の平成から令和へ、常に己が身を粉にして人の為につくす。水明創刊90周年の記念祝賀会に向かってどうぞ英気を養って下さい。無月とは云うものの美しい雨に明るさを感じる。

由良ゆら女

A面もB面もなく大海鼠
何時の間にこんな齢に春炬燵
ぽつかりと大蛤が根来椀

取合せの意外性に度胆をぬかれた一句　容赦ない時の流れは誰もが思うことだが、嘆かず笑顔に変える季語の選択がうまい。無駄な言葉は一切なし、根来塗の大ぶりの椀に大蛤が鎮座、湯気だつ吸口の柚子のいい香り。

霊山の奥をゆたかに時鳥
杉の穂に明け初む空や蟬生まる
鬼の子に夜は満天の星飾り

暁闇の星を仰ぎつつ奥の院へ急ぐ高野山夏行を彷彿。〈鬼の子〉は関西例会で多くの共鳴を得た。月に一度例会でお会いするが、大抵はゆら女さんの句を選んでしまう。この一年句心に磨きがかかり感性の冴えで魅力ある句を多産。

島津　初花

大空へ放つ梅が香城子句碑
飛んで来て蛙呪文を吐きゐたり
夜蛙や野は合唱の大舞台

城子師の志を継ぎ若狭水明会を支える初花さんを尊敬。「ねばりひきあろかと田向ふの初蛙」を想起、歴代の句碑のお世話をして下さる初花さんに感謝。呪文を吐く蛙は鳥獣戯画の世界で豊かな自然に抱かれ句材は尽きない。

桔梗の蕾解かれて姉逝きぬ
走馬灯桔梗の白を染めもして
トランプの札返すごと刈田かな

角が五つのききょうの蕾、触れるとポンと裂けそう。澄みきったむらさきにお姉様を案じ、咲いた刻には訣れが待っていた。亡き人をしのび共に笑いあった日がなつかしい。深い悲しみが胸に迫る。トランプの札返すごとはまさに云い得て妙。

池田　雅夫

足元の寒さ蹴飛ばしゆく走者
置き傘の出払ひ尽し菖蒲園
出るとこへ出て潔白の油虫

季音賞に輝き月欄へ御昇欄おめでとうございます。雨の似合う菖蒲園は混んでいるのだろう。決して急がない人々が紫の雨をたのしんでいる。花びらを雨の玉がころがり匂いたつ菖蒲。人間より先に地球上に生きていて「キャーッ」と毛嫌いされる油虫は気の毒、雅夫さんの油虫へのエール。

村芝居凶状持ちの役どころ
綿虫の行方を追へば我が在所

黒子の声が大きくて観客の笑いを誘う地芝居。凶状持ちの役はもしかしてジャンケンで決めたのではと思わせる滑稽。お父様の介護と仕事の両立、料理のレパートリーも広げ立派。

田中　千穂

冬耕のおこす一鍬土の息
裏白の乾反りていよよ褻に入るる
累代の雛に朝の風とほす
鼻欠けの狛犬の「阿」青楓
秋の晴僧一列にぼんのくぼ

〈土の息〉の発見〈乾反りて〉の観察眼〈褻に入るる〉の語彙の豊富さ、的確な洞察力と感覚で読み手を想像の世界へいざなう。面輪を包んだ薄綿をはずし一年ぶりのお雛様にご対面の喜びを〈朝の風とほす〉で表白。狛犬の古きものと青楓の明るさの対比は風の色をまざと感じさせる。歯切れのいい詠みっぷりが心にひびく。きっと気宇快闊な方と思う。一年間に三回の巻頭も宜なるかな。さらなる躍進を期待します。

五つ星

菊池ひろこ

西山貴美子

山茶花のこぼれ初めたる裏鬼門

山茶花は椿とは異なり、花びらが個々に散る。「裏鬼門」の気が花の散るのを早めたとまで言っては深読みであろうが、そのように思わせる取り合わせが巧みである。

シテ役に徹してをりぬ寒の鯉
尾頭を振つて沈みぬ寒の鯉

流れが穏やかな川や池に生息する鯉の動きは、その鮮やかな色と共に人の目を惹く。尾頭を振り、やがて沈んでゆく鯉も観られているのを知っている、と感じた時「シテ役」という言葉が生まれたのであろう。

鉄風鈴青海原へ吊るしけり

南部鉄風鈴の音色は『残したい日本の音百選』に選ばれているほどである。その音が青海原を思わせたのか。感覚の鋭い作品である。

森　千代子

梅雨三日ぬりゑのゑの具はみ出しぬ

絵の具で塗り絵をするのはお孫さんであろうか。水彩絵の具のある色が少し線の外にはみ出してしまった。梅雨三日という「水」に囲まれた生活を、水彩絵の具のはみ出しというもので表した巧みな句である。

わが影にはつと戦く虫時雨
受話器置く嫉むが如く虫の声

虫時雨の闇に動いた自分の影、電話での楽しい会話を嫉むかのごとく受話器を置いたとたんに沸いた虫の声。虫の音と人間の感情をこのように捉えた感覚は鋭い。

柿に光輪鴉同士が呼び合へり

光輪とは、絵画などで聖人の頭部に置かれた円光を指す。柿への光の当り具合を「光輪」と表現し、折からの鴉たちの啼き声をあたかも尋常ではない現象を知らせあっているかのように見ておられる。小さなことを見逃さず、句に昇華させた手法はさすがである。

網野　月を

冬霧の薄くまた濃く丸木橋

冬霧と丸木橋とは、取り合わせというよりは一物仕立てに近い。丸木橋を渡る足元、霧が濃くなれば不安になり、薄くなればほっとする。丸木橋の実体のようなものが、さらりと詠まれている。

初鶏や通販雑誌に犬の耳

十二支が隠れた洒落た遊びの句である。「初鶏」は「酉」、犬の耳は「戌」、詠まれたのは「亥」の年であろう。「通販雑誌に犬の耳」とは、猟具の広告等に見る、鳥声に耳をピンと立てた犬の写真などであろうか。

使ひ古しのネルの靴下潮干狩

一家総出の潮干狩。その家の主婦が準備したものには、底にネルを貼った靴下もある。足の裏に滲む水の感触まで感じられる句である。

白バラの負ひ傷赤の負はせ傷

氏の句には時折二項対立的なものがある。「白バラの負ひ傷」も斬新だが、「赤の負はせ傷」には瞠目した。白が女性で赤が男性か、などという詮索は不要であろう。

矢作　水尾

北風や走り根しかと土を抱く

他の根に比べ土中で極端に伸びた長く太い走り根。「しかと土を抱く」の表現が巧みであり、作者の温かい眼差しが感じられる。

鳥の巣の日毎ふくらむ深廂
鳥の巣やわれら大地の襞に生く

鳥の巣のふくらみは、深廂の中からは目を上げなければ見えない、飛び立ってゆく鳥と比べ、我々が住むのは身動きならない狭い大地の襞ではないか。「大地の襞」という表現がこの佳句を生んだ。

対岸は墨田区墨田芦の角

荒川を隔てた対岸の「墨田区墨田」が利いている。「すみだくすみだ」という音を持つ地名に懐かしい思い出をお持ちなのであろうか。芦が角ぐむ頃、川辺に立っておられた作者のお姿が彷彿とする。

原田　秀子

酒林躱して飛ぶや初燕

造り酒屋の軒先の酒林、それを鮮やかに躱して飛ぶ初燕。一瞬を切り取った句であり、軒先に巣をつくる燕の習性を暗示してもいる。

ふくよかな埴輪の肩に秋茜
秋風に諸手を翳す埴輪かな

古墳時代の埴輪は、縄文時代の土偶とは異なり、古墳に埋葬された人のために作られている。それだけに、一つひとつの埴輪には何等かの思い入れが感じられ、これらの句のように、生きた人間を見るようなまなざしが生まれる。「秋茜のとまる肩のふくよかさ」、「秋風にもろ手を翳す埴輪たち」、これらに気づいた作者の目は暖かい。

要下すこしゆるみし秋扇

秋扇の要の下の部分のゆるみにまで目が届いている。夏の間、酷使した名残りであろうか。秋扇ならではの状態を季節感ゆたかに詠んである。

四季のこゑ

椎野美代子

吉住　光弥

香煙のたゆたひも空秋の逝く
室咲きや天空花野美しければ
人は花はなは人恋ひ花の冷え
亭主亡き茶室の庭に秋茗荷

七十有余年添われた奥様を天空に委ねられた。何れの立場でも言葉にはならぬ経験者のみの慟哭。十七文字に数千の文字の想いを託した重くれない表現の抑制は、むしろ喪失感の深さを物語る。―使ふならハンカチどうぞしあはせに―此の優しさ、ユーモア。奥様お倖せでした。

寝冷子や竹林蒼き雨あがる
即身仏祠に雨の白桔梗

寝冷子と措辞の間に時間の流れと気温の変化の含みがあり、季語を納得させる。竹林の蒼い雨の齎した寝冷であれば心配無用。古来より格式高い家紋に用いられる桔梗。五裂花のきっぱりとした立姿は仏の魂魄を鎮めるばかりに雨の中。素材の配合が生む余情の世界は鑑賞の裾野を広げる。

永野　史代

世を隔て人を隔てて冬帽子
煩悩を断ちぬ冬帽深くして
体内に刃金の匂ひ野火の夜

年間を通じ作者の肉声が読み手の胸をノック、時に危惧し時に安堵する。数十年に亘り俳句をよすがに親近感を持ち続けて居るからかも知れない。二句共に冬帽子に離俗の心理を象徴させている。一転し、野火の夜の原始性を見据え体内に宿りくる生命力を〈刃金の匂ひ〉との感受が確かなものとした。

てのひらをくすぐるやうに白魚跳ねる
指貫きのかすかにゆるくなる立秋
逢ひたき人は遠き人なり秋の雲

仮名書きは読み手の〈てのひら〉に白魚の其の感触を伝えて成功している。ゆったりとした調べを伝えるからであろう。指貫は季感と相俟って物語りを生む。逢ひたき人は距離的なことではない、現世か彼の世のお方かは秋の雲のみ知っている。三句共、詩的共感を覚え美しい作者の永遠の青春性を垣間見る。又左記の作品の世界感に驚き、多面性に驚く。

ケ・セラ・セラドリス・デイ死せり朱夏
「君死にたまふこと勿れ」惜春

菊池ひろこ

八十路なほミモザの花の降るを待つ

風花舞ふ電線に触れ唇にふれ
鳥雲に旅人の目に甍波
地球なる星の地表ぞ潮干狩
潮干狩倦みて熊手で空を掻く

街路樹に花舗に冬の終りを告げるミモザの花の黄色。パリの街では花束のミモザを抱える人で溢れるとか。その様子をパリに遊んだ虚子が詠んだ句がある。

齢を幾度重ねようとも気持の有り様は、ミモザの花束を贈られた往時と変わりはしない。無機質な電線と血の通う唇に触れた儚い風花の様態を写生に徹し描出。季感に裏付けされた甍波が立ち上り眼前に迫る。両句共に客観写生の中に心象の切りこみを見る。潮干狩に繰り出した大勢の人は地球の地表に屈み脇見もせず夢中に熊手を使っている。作者は腰を伸ばし熊手を玩び空ではない〈空〉を掻いていると云うアイロニーを見落せない。対象を端的に捉え季語との生む余白を埋める楽しみを読み手は享受。

梅澤　佐江

縺るるは人の心と毛糸玉
大根のああ赤心の白さかな
神苑に菊の白妙巫女溜り

逡巡せず物と心の有り様を同列に置いた物言いが心地よい一句目。本年度の水明賞受賞作家。「受賞のことば」も大会時のご挨拶も然り、このまま独自の世界を展き続けて欲しい。大根の白を、いつわりのない心、まごころ、即ち〈赤心〉と擬人法で捉え詩へと昇華した。その瞬間把握の発想、飛躍の独自性は貴重である。俳句は大根をすぱっと両断した切口の瑞瑞しさを詠めとの事だが、言うは易く…であるが心得たい。掲句は別視点の大根。三句目〈白〉を枕言葉でもある〈白妙〉と描き巫女装束にまで及ぶ働きを描出。穏やかな色彩美しい神苑の佇まいも自ずから見えてくる。次句は嗅覚と皮膚感覚に依り齎された二句。清々しい朝の燕、二季にまたがる風のさまを優遊の雰囲気とし伝える。

肩かすめ水の匂ひの朝燕
ゆきあひの風も清かに秋はじめ

正木　萬蝶

柘榴熟れ大人の嘘をつく少女
大寒のスーパームーン人魚死す
百合の香に折檻されしひと日かな
風花や糊の利きたる藍のれん
潮干狩縄文人の体を成す

柘榴と云えば「石榴割れる村のお嬢さんもう引き返さう」星野紗一〈昭和二二年作〉が脳裡を占める。かな女師が暫々話題にされ世にも喧伝されもした。自註に〈様々に問われるが架空の話しとしている〉とある。一句目の〈大人の嘘〉を問えば答の無い同質が内包されている様に思われる。十七文字がそのまま絵本となる美しさ。〈折檻〉が〈ひと日〉であれば許され百合の品位を貶めてはいない。意表を衝く言葉ながら納得させる説得力。次句二句、何れも情景を活写、楽しく気分明朗に誘われる。

春華秋実

島津　初花

椎野美代子

なみなみと朝日を汲みしさくらんぼ
入口は出口の果樹園さくらんぼ

さくらんぼに統一された五句は、五感での味わいを読者に深めている。作者はさくらんぼ狩りに行かれたものと思う。果樹園の中に入ると、目の前に朝日を吸い込んで瑞瑞しく光っている赤い実に心弾む作者の姿が見える様だ。

君の掌にのれば爆ぜるよさくらんぼ
食むうちに言の葉なりぬさくらんぼ
朝の卓微笑み返すさくらんぼ

あとの三句は、体感で味わっている。ピチピチと張り詰まった一粒一粒は投げ玉の様に思える。口に含むと甘くて、切なくて言葉で言い尽せない幸せの味である。最後の句は、家族の朝の食卓。笑顔が笑顔で返す波長は、さくらんぼが人の心を和ませる力があって、五句の中からあふれ出てくるのを感じた。一度は行ってみたい「さくらんぼ狩り」である。

茂木　和子

植木鉢あまた伏せある梅雨湿り
尾を立てて見馴れぬ鳥ゐる梅雨湿り
マッチするぽぽぽぽぽぽと梅雨湿り

二句通して梅雨湿りを平然に味わってから、三句目に、突如オノマトペに出合った時、まるで催眠術をかけられた様な気持にさせた擬態語が、いまにも消えそうなマッチの発火に「ぽ」の六文字は、どれ丈の意味が込められているかと考えさせられた。目の前に「シホンケーキ」が運ばれて来た様な気分であった。

百日紅朝の確かな深呼吸
さるすべり雨後あざやかな花のいろ

七月から九月、散っては咲き、雨後はまた色鮮かに咲き続け親しまれる花としてよく詠まれるが、最後をさらりと収められた句に清潔さを感じた。

石山かつ子

春の鴨着水の水かがやかす
日だまりにこの白鳥の深眠り
残雪の山に向かうて耕運機
勾玉は胎児のかたち春浅し
大学の裏のくらさよ残る雪

春を鳥たちによって感じ、安定した春を岸辺で見つけた白鳥の呼吸に胸おどらせている。三句目の残雪の山が目の前に輝いてくる頃になると野良仕事が始まる。この光景は親近感を持って味わった句である。

若狭の上中地区には、十一基の古墳があり、そこから発掘された土器や装飾品の中には、勾玉が数多くある。まさに胎児の形である。私もイベントで勾玉を磨く作業のサポーターをしていたので共感した一句である。最後の句は、建物の裏側は陽が届かないため、おそくまで雪がのこっているのを発見し、陰と陽の差を肌で感じ取っておられる。春本番は目前に。

五明　昇

秋鯖に手秤で振る伯方塩
アプト式通ひし峠草の花
弓張月従へて行く外航船
芋水車残して暮るる峡の宿
旅そぞろ口三味線に荻の風

作者はすでに二冊の句集を上梓されている。泉のごとく句が湧き出しているかに思える。更に旅がお好きなところから旅先で詠まれる句は真新しく、読者を引き付けている。

この五句から若狭熊川宿が色濃く詠まれていると感じ取り地元に住む者には嬉しくなって筆が走る。

小浜湾で捕れた鯖をひと塩して、昔は天秤担いで京都へ十八里を走り抜けた道が鯖街道である。アプトな峠道も今は道路も整備されて車は軽快に走っている。

町屋の前川にくるくる廻っている芋水車は旅人の目を引き三百年前の街道の面影がいくらか残っている町並を作者は通り抜けられた様だ。そぞろ旅と詠まれ、枯れ果てた荻の原の峠を後にされたものと推察する。

原田　想子

捥ぎ手なし屋根低うして柿明り
栗の飯ほくほく病癒えにけり
柏手のきれいに二つ妻の秋
美しく土もち上げて茗荷の子
地の神に残す一本大根畑

家族と夫婦愛を大切にして居られる作者で、しばしば句に詠まれている。夫の快気を祈ってくれている妻の姿をきれいと言っているところが素晴しい。作者は信仰深い人である。田や畑の一隅に祀られてある神は地の神様で、春は竈に、夏は門に、秋は井戸に、冬は庭に舞い下りて守って下さる。大根畑の一角に祀られてある神に一本残そうとする行為は、只の行事にもとづいたものでなく作者の感謝の心のすべてをまとめた五句に共感しお二人に拍手を送ります。

一陽来復

霜中　冬至

波多野寿子

糸・竹の語り高まる秋夜かな
青田波囃す双体道祖神

秋の宵がさらに更け静寂な雰囲気が漂っている。糸と竹の語りが高まるとは、琴、三味線の弦楽器と、尺八の管楽器のことである。管弦で秋の夜長の情趣を様々に味わうことができる。青田波は、まだ穂が出ていない青田である。夏の日本を代表する美しい田園風景である。その風景を道祖神が囃している。しかも〝ふたご〟を孕んだ道祖神?とは意味深長である。

聴いてみりや艶歌もいいね春炬燵
数の子を噛んで余生をたしかめる

春になっても、まだまだしまいかねている炬燵がいとおしい。久々に耳に入って来る艶歌もこれまたいとおしい。艶歌と春炬燵は、えも言われぬ共通点がある様だ。次の句も、数の子と余生とのつながりに宿命的な因果関係を感じるものである。

境　延昭

岸壁に鉄錆にほふ残暑かな
妻に手を引かれて入る踊りの輪

残暑と云う言葉には何ともいえぬ疲労感や倦怠感がつきまとう。岸壁に鉄錆におう景とは、残暑そのもので、立秋が過ぎて残る暑さが印象的に捉えられている。次の妻に手をの句は、引っ込み思案の殿方でも妻に手を引かれれば踊の輪も満更でもなかった。

枇杷すする唇あつき島娘
三月の浜に少女が泣きに来る

枇杷は古くから日本にあったとされ山野に自生していますが地方によっては海岸べりに栽培されているところもある。島娘が、あつき唇で枇杷の実をすするとは官能的な描写である。三月は少女等に取っては、出合いと別れの季節であり悲喜こもごもである。三月の浜は少女等に絶好の泣き場を提供してくれる。

石井　喜恵

雨を呼び雨に散りゆく四葩かな
多過ぎる釦の穴や梅雨湿り

四葩の花は、日本原産の額紫陽花が母種とされている。一

般的には「あじさい」と呼ばれ広くわが国の山野に分布し陰湿の地を好み、梅雨入りの頃から咲き始め、梅雨明けとともに花期は終る。

体温の残る揺り椅子春の闇
靴底の微かな歪み木の実踏む

体温の残る揺り椅子から、春と云う柔らかさと、初々しさを闇に重ね奥行をもたせたものだろう。
木の実を踏む感触をわざと体感したい感傷は、幼心で俳句の感触の域である。先・先代の、紗一主宰の感触俳句の話が蘇る。

荒井　倶子

新米や少し古びし夫婦箸
どぜう鍋長寿談義にはな咲かす

どぜうや新米の話になると、夏から秋にかけて疲れた胃でも活気づいて来る。しかし、新米と夫婦箸、どぜう鍋と長寿談義と話題が豊富すぎると大切な季語が惚ける感じがする。新米や、どぜう鍋をゆっくり大切に賞味しよう。

栄転も左遷もなくて金魚飼ふ
かたくなに守る土蔵や柿落葉

お勤め一徹に生きる真面目な暮らしが伝わって来る。
趣味に金魚を飼うやさしさと、あまり使われなくなった土蔵をかたくなに保存される夫への応援歌の様だ。
季語の柿落葉と金魚から、その人の生き様まで洞察した、とり合せが見事である。

松宮　保人

草刈るや海に傾(なだ)るる千枚田
露天商一店来たり春祭

千枚田は、全国のあちこちにたくさんあるが、どこも不便な僻地にあり、そこでの農耕には多くの手間がかかるため敬遠されがちである。ところが最近、不便を逆手に取って観光の材料に使われる所が多い様である。
掲句は、能登棚田の事だと思うが、最近、私ども若狭の海岸にも、百人一首に登場する二条院讃岐が詠んだ沖の石が眺望できる若狭田烏(たがらす)海岸の棚田も活気づいています。

孫去りて日ごと細りし雪達磨
婿が居て日の出を拝す初景色

雪のない冬は殺風景であり冬を味わう事ができない。
里帰りする孫達には、冬景色と雪達磨づくりは、その生涯で忘れられない思い出となるだろう。
来春の初景色は、令和最初のお正月を迎える。
我が家にとっては、待望の新婿を迎え、一家団らんのめでたい初日の出を拝することができる。

五色の天衣

柚木　治子

小林萬二郎

凍鶴の千年の呼気田を鎮む
剪定や実り佳き日を想ふ枝

水明の重鎮である作者の俳句は、花鳥諷詠の真っ只中を行っているのが多い。この句も然り。千年を生きると尊ばれている凍鶴が天に向き息を吐く姿は、作者の自画像であろう。庭師の真摯な姿がぱっと浮かぶ二句目は、自然に向けた作者の優しい目がたまりません。きっと見事な実が成りますよ。

聞き流す女房の小言古浴衣
秋澄みて指呼に峨峨たり剣岳

女房の小言と古浴衣がぴったりの取合せの佳句です。大きな景色を詠み、指呼のフレーズで聳え立つ剣岳へ一気にくぎづけにさせる技巧が見事です。

山中みどり

残されし刻は如何程初湯かな
浅春の遊船繁きすみだ川

人生は、後戻り出来ないと意識するのはいつ頃からでしょうか、誰にでもあるふと過ぎる思いを、如何程という副詞を用いてやわらかに表現されています。
早春賦を口遊みたくなる非日常の景色が広がります。遊船に浅春を感じ取られた感性、川をひらがなで詠まれたひと工夫で、一段と情緒あふれる佳句となりました。

亡き人の気配に灯す盆提灯
金木犀記憶のずれる友と居て

歳時記の解説によれば、盆の行事は推古の時代にすでに行われていたとあります。新しい盆提灯をともす作者とかけがえのない亡き人との一瞬が浮かびます。
二句目、なぜか遠い日を呼びさます金木犀の香り、友人の病を「ずれる」と詠まれた中七に心根のやさしさが伝わる。

鈴木　康世

わくわくと削る鉛筆桜咲く
面倒な鬱の字画や薔薇香る

私も鉛筆が大好きです。Ｂの硬さが良くて十本削るとやる気が出てきます。窓外には桜が咲き春本番、わくわくしながら鉛筆をけずる作者の次のたのしみは……。
面倒な鬱の字画を主語にされた一句、読むのはともかく書くのはむつかしいです。しかし鬱は憂鬱などの暗いイメージだけではなく、カレー等に黄の色をつける鬱金、鬱金花が思われ、薔薇の華やかさと絶妙に響き合います。

肩が知る手の温もりや十三夜
来し方を三面鏡に見る秋思

抱き寄せられた一瞬の温もり、それが永遠となった思慕を十三夜との取合わせで情緒ゆたかに詠まれている。
母に似てきた三面鏡の自画像に来し方を思う作者。

藤澤　喜久

冬椿「おばこ」ころころよく笑ふ
るるるると芽吹きほぐるる雑木山

令和元年の全国大会で季音賞を手中にされた作者、ころころの擬態語で「おばこ」のほがらかさを出し見事です。
一粒一粒がまるで意志をもってほぐれる芽吹き、るるるるのフレーズで雑木山の命の讃歌が聞こえてくるようです。

馬車道に瓦斯灯明治の秋燈
刈り急ぐ先へ跳ね飛ぶ蝗かな

一読して瓦斯灯が立つ明治の馬車道へタイムスリップする不思議な臨場感のある句であり、秋燈の季語が絶妙である。
機械が入りずらい棚田を刈り急ぐ農夫と撥ね跳ぶバッタの一瞬を切り取り、牧歌的な佳句を生みました。

井口　俊晴

頑張りし自転車磨き卒業す
新緑や花嫁祝ふ鐘響く

卒業式が終り、一心同体だった自転車に語りかけながら磨いている後ろ姿を目にして、感激と安堵の親の気持が伝わる。
山頂の結婚式に出席した眺望を思い出します。鐘はみどりの風となり未来へと鳴り響き風船をつれて舞い上がりました。

朝顔の蔓の長さを絵日記に
草木の闇を絞りて虫の声

花を支える蔓の生命力に感動して、絵日記に描く子供のするどさ、根に近い蔓は木のように強靭で固いですよ。
生い茂る道を行く作者、闇が絞り出す鍛え抜かれた妙なる虫の音に心を奪われ金縛りになり詠まれたのであろう。

山本鬼之介　選

水明集

帰り花米寿の叔母のハイヒール　川口　野田　静香
道なりに行けば館に冬薔薇
部屋に焚く香り薄れて初時雨
冬めきてささやき残る耳愛し
朱の橋の水面を崩す初時雨

すき焼や醤の満つる四畳半　鴻巣　大塚　茂子
湯の宿やからんころんと夕紅葉
ゐざり機響く里村小六月
小春日の貨車匂ひけり秩父杉
里村に空の重さや柿花火

立冬やスカイツリーの影の街　さいたま　日高　徹
反骨の人みな逝きて一葉忌
喰ひ違ふ親子の思ひそぞろ寒
行間を読む楽しさや冬の雷
顔見世や客待つまねき文字のはね

聞きなれぬ人の足音今朝の冬　青木　鶴城
鎚音の絶えて久しき鍛冶祭
汁粉にも辛口ありや一葉忌
手に取らば時空を超ゆる楪の実
友の有り囲炉裏の酒に夜を混ぜて

薪割りの斧にぽつりと初時雨　渋谷きいち
軒借りて謝する旅人花八手
冬めくやギィーと泣きゐる蝶番
言はず語らず母へ感謝の冬の月
山眠り寝息かすかな感謝の夜

香煙の功徳を手繰り秋遍路　行田　近藤　徹平
晩秋の母子の戦時帰国船
終バスの尾灯消え去り虎落笛
小春日や筒音しのび田原坂
おひらきは校歌斉唱牛鍋屋

八瀬の夜の人も獣も露寒し
露寒や奸婦の塚を労りぬ
黄落や見上ぐる浅間くろぐろと
黄落や真つ赤な嘘の共白髪
うそ寒し凡夫しつかと万馬券

横浜　正木　萬蝶

糸底に淀みたる陰露寒し
野分跡腰まで曝す武甲山
目の前に母の健啖吾亦紅
柿吊し諍ひのなき嫁姑
跡取りのをらぬ神主秋まつり

さいたま　曲淵　徹雄

王羲之の写本の真偽秋ともし
竹籠を編む指太し秋の昼
炭坑節を偲ぶぼた山星月夜
胸晴るる尼の説法初紅葉
邪馬台国の揺るる真説新走

保坂　翔太

道問へば笑顔の返事文化の日
縄のれんの奥に国旗や文化の日
一番鶏のひびく朝や一の酉
おらが家の大根揃ふ道の駅
大根やばつさり切れぬ縁あり

草加　河野はるみ

早朝の道掃く音や冬に入る
鉄棒の消えし公園木の実落つ
満身の力をこめて布団干
今日の陽に総身ゆだぬる干布団
粕汁や水槽の魚肥満体

さいたま　宮﨑チアキ

野仏のおん手に遊ぶ桐一葉
風焦げる匂どこから茸焚き
誘はれてひたすら優し紅葉川
いちまいのもみぢの押葉いのち美し
吹きだまる落葉ひしめく道のくぼ

熊谷　神田　治江

初冬や佐渡から届く合せ味噌
眠さうな馬の目ん玉返り花
小春日や嵯峨の土産は夫婦碗
古地図手にめぐる本郷小春空
一兵の誉れの石碑帰り花

さいたま　染谷　正信

秋佳き日帳（とばり）開きたる高御座
甦る力を残し枯木立
陽の匂ふ布団に就けば夢に母
旅の宿布団の軽さ気にかかり
冬ざれの家路を急かす夕陽かな

熊倉千重子

参拝の鈴音湿る初時雨
参道は木の葉しぐれに隠れけり
対岸の藁焼くけむり冬めきぬ
天上の母に感謝のきりたんぽ
行きすぎて見返りたれば帰り花

さいたま　新　暦文

遡る川の源流冬日和
手作りの器程よく蕎麦を掻く
蕎麦掻や爺の楽しむ手酌酒
すき焼や小さき頭ものり出せり
手を繋ぐ母の温もり暮早し

熊谷　越田　栄子

小町針そのままにして暮早し
暮早し三日坊主の写経かな
百畳の伽藍の床に紅葉映ゆ
隧道のいりくち彩ふ蔦紅葉
蕎麦掻を尋ね秩父路直走り

高崎　原田　秀子

節電し静かにくらす一葉忌
覗き見る財布の中身一葉忌
日のやさし木の葉降り積む光堂
雨冷や続く読経の阿弥陀堂
立冬や富士の嶺白く聳え立つ

さいたま　加藤でん治

仲のよい夫婦時には唐辛子
棗の実土蔵壊され土けむり
冬めくや渓の田畑無口なる
冬めくや煙漂ふ村静か
穭田やツーリングの音けたたまし

若狭　飛永　鼓

落花生筵に干せば鴉来て
小学生馴れぬ稲刈楽しみて
菊膾酒宴の膳に色を添ふ
鶏頭や脳髄に似る皺を持つ
椎の実の罅ぜる音して更ける夜

さいたま　田中　章嘉

まだ色を残す徒花冬に入る
今朝の冬少し熱めの汁の椀
束の間の陽射し待ちゐる冬の鉢
土洗ひ鎌を労ふ今朝の冬
指先を隠す袖口今朝の冬

秋山　紅花

短日や記すこと無き日記帳
暮早し見知らぬ道のなほ遠く
石段を見上ぐるばかり神の留守
隣より小菊の覗く一葉忌
単線の窓を打ちゆく芒かな

伊予　向井　章子

陽明門拝みし後に新酒酌む
引出しの中身入替へ冬に入る
紙を敷き鉛筆けづる一葉忌
立冬の日差し遮る一里塚
山茶花の花びら拾ふ行き帰り

下町の路地から路地へ一葉忌
一葉忌訪ねあぐねる旧居跡
一葉忌哀しいほどに薄き本
間をおいて鹿鳴く声や奈良の原
かそけきは木の葉の音か靄の中

里山の瀬音遠のく初時雨
正殿に籠る山気や照紅葉
柳散り澱む水面を雲流る
里山を靄が包みて初時雨
神棚に積もりし重さ神無月

百獣の王の欠伸や園小春
かうしては居れぬ小春や庭仕事
鴨着水たちまち陣を整へり
何あらむ岸辺離るる鴨百羽
池水の濁らぬほどに時雨けり

さいたま　橋本　京子

山口　韶子

秋本カズ子

上尾　横山　君夫

蕪蒸し京の置屋の女衆
道具持つヒト科のヒトや牡蠣を剥く
帯電の理科の実験シクラメン
顔見世やオーラを放つ団菊左
大くさめ決めのポーズに決め台詞

味のしみたる丸き蒟蒻里祭
水害の家並を包む朝の霧
頬と口ほんのり紅き七五三
すき焼や「皆で料理」と子が燥ぐ
菜園は男の楽土大根抜く

気心の知れた旧友紅葉狩
谷紅葉手摺頼りの急階段
揚げたてのポテトフライを紅葉茶屋
雨雲に追ひ付かれたる紅葉山
圧巻は上州古刹の床紅葉

柿の葉の音して落つる初時雨
朝に咲く花一輪の帰り花
父母の感謝の祈り千歳飴
冬めきて葉を掃く音の佗しさよ
スケッチは桜落葉の遊歩道

さいたま　大槻　瑳蘭

斎藤　みよ

東京　太田　絹映

さいたま　塩野　久子

道端の銀杏蹴つて登校児
本当は温和な顔かきりぎりす
散歩道名もなき草に朝の露
駆足で沈みゆく陽や冬近し
抜け道を探してゐるや秋の蝶

さいたま　水野　興二

菜園に縺れもつれて秋の蝶
秋蝶の羽を閉ぢゐる石の上
松手入れ脚立に足の笑ふなり
ごろごろと栗多すぎる栗の飯
駅伝の抜きつ抜かれつ冬に入る

若狭　山﨑　郁子

文化の日残りて今に子規の庭
冬麗や黄色あふるるゴッホの絵
畑隅の根のたくましき冬の草
大群に将のあるらし冬の鳥
葉をひろげ生き抜く知恵か冬の草

さいたま　西幅　公子

黄落やパントマイムのピエロ跳ね
潔き運動会のライン引き
この日だけ家族総出で稲刈りす
身に入むや日に三本のバス停に
恐るべし新米と言ふ塩むすび

東京　石田　慶子

虫食ひに朝陽さしこむ枯葉かな
凜と立つ「早雲像」や冬日和
狐火や止まりし時計動き出す
寄鍋のお代りをする義母の箸
タクシーが踏みゆく路地の柿落葉

平塚　丸屋　詠子

冬の朝文化遺産の焼け落ちし
水鳥の番の姿今朝はなく
冬草の「三角公園」夕日受け
冬草に足元とられ会ひに行く
恋文を見つけてかざす息白し

さいたま　梅澤　輝翠

冬うらら厩舎の牛の大尿
浮寝鳥漂ふ先に滑走路
小春日や乗りて五分の渡し舟
焼鳥をみやげに亭主千鳥足
毛糸編むマニキュアの指しならせて

笹本　啓子

悔しさを靴底に込め落葉踏む
少年に戻る再会小春空
全盛の傲りも知らず落葉散る
冬菊の高さに尽きぬ会話かな
建つ家と壊す家あり今朝の冬

山戸　美子

熱燗や遺影の顔も飲みたさう
熱燗や耳にとびつく指の先
掃くことをためらはしたる散紅葉
音もなく散りゆくもみぢ苔筵
まざまざと災禍の跡や秋の雨

杉戸　佐々木史女

十七文字をパズルのごとく文化の日
満月に消えし天文オリオン座
冬びより参道二キロ来て鳥居
草刈れどはげ山になほ冬の草
冬麗の夕陽に染まる浅間山

さいたま　竹澤　和子

柿たわわ「こども一一〇番の家」
お番菜の買物に来て片時雨
約束を反故にされたり夕時雨
侘助や今日の干菓子は小判形
侘助を侘しからざる花器に活け

東京　石川　理恵

渡せずにバレンタインの日の過ぎて
春風にメトロノームの三拍子
四つ角の時計が見入るもの芽かな
囀はリサイタルやう広がりぬ
佐保姫と人魚姫しほさゐの中

所沢　関根　千恵

秋の日やのつぽマンション完成す
城紅葉夫婦で作る屋台店
秋日和神の水汲む小さき手
秋の陽や子孫繁栄鯉の群れ
秋惜しむはるか彼方に里の山

和歌山　南條きわゑ

六地蔵の背なを焦すや櫨紅葉
能面の十余の視線冬の雷
桐一葉手配写真のやうな夫
オープンカーの座席は高め菊日和
災害のゴミの行方や秋時雨

高橋満耶子

草原にオカリナ響く星月夜
鮎落ちて喧騒暫し山湯宿
恙なき友の手作り干柿来
秋祭友らと交はす国訛
吊橋を揺らし紅葉の客となる

春日部　仲田　利子

荷解きの地方紙見入る縁小春
小春日や土鈴からころ門前町
切株の座りよきかな小六月
焼鳥屋の店主こだはる備長炭
焼鳥の煤けてうなる換気扇

さいたま　森　和子

霜月や予防接種を先づすませ
朝刊に思はぬぬくみ霜降月
霜月や「また今度ね」と指切りす
秩父路の生な椎茸とりにけり
茶の花や記憶に母の盲縞

さいたま　髙橋　敏子

定まらぬ威嚇のポーズ枯蟷螂
一打ごとに命を削る枯蟷螂
夕日浴び生への感謝枯蟷螂
灰燼の首里城悼む冬の空
冬ざるる綻び直す千曲川

松田　朋子

青々と稽田風の細やかに
今度こそと嫁御とパズルする夜長
白鵬もデビ夫人も居る菊花展
返事して起きれば夢や夜半の月
庭中の花に名札や神の留守

横浜　川島　典虎

添削の赤ペン嬉し帰り花
お隣の日ざしも貰ふ帰り花
冷やかや身ぬちつらぬく風に会ふ
手短に終ふる手水や神無月
カピバラの湯あたり気味や落葉降る

さいたま　下川　光子

初時雨道祖神をも洗ひたる
小春日や六地蔵の谷中道
竜頭の滝の白き飛沫や山粧ふ
肩冷えて全山紅葉迷ひ道
鶏頭に雨降る朝の静けさよ

さいたま　新井　孝麿

淀川の舟宿の膳神無月
安さんは鞴祭の土産下げ
鬼瓦宙をにらみて神無月
首里城の炎に涙時雨月
ラグビーの巨体燃えつき神無月

藤岡真知子

屋台酒新酒と云はれもう一本
老の秋心の杖となる句帳
黄落や第九楽章始まれり
下戸なれど新酒一杯頂戴す
新蕎麦の香り立ちたる益子焼

川村　治

秋深し俳句を糧の余生かな
野分後釣糸垂るる遊水地
芋虫の喰ひたる葉よりなほ青し
音もなく敷石濡らす秋の雨
サイクリング頬打つ風の冷やかさ

反町　修

両の手に焼芋ほつこりフウフウフウ
遣り取りはメールで済ます冬隣
立冬や畦に寄り添ふ道祖神
額の絵を山に替へたり冬隣
秋惜しむ水琴窟に耳澄まし

さいたま　田中　泰子

夕暮や鴨の羽音の凄まじき
漂ひてあなたもひとり浮寝鴨
空青く山は色づき神の留守
長椅子にひねもす横に神の留守
小春日や合せ鏡をして外へ

高原　和子

救急のサイレン二度目朝の霜
着ぶくれて天涯孤独に近く生き
マフラーや掛り付け医師まだ持たず
同席に新婚ダイヤ婚小春
枯葉一枚看板娘のまま老ゆる

いすみ　平石　睦子

柿干して今日といふ日の終りけり
小春日や朝から児らの声弾む
ドライブを楽しむ小春つづきけり
鴨飛来待ち尽す好好爺の眼
地に還るものの静けさこぼれ萩

栃木　佐々木典子

冬うらら森林浴のレストラン
釣り人と湖水に群るる浮寝鳥
浮寝鳥流れの草に見え隠れ
文化の日懸崖香る城下町
庭園の水鳥泣くも動きなく

さいたま　小川　洋子

高校野球棒立ちになる文化の日
神殿に棒立ち拝む文化の日
冬桜亡母（はは）と交せし文の嵩
マスクして薄墨で書く忌の知らせ
推敲の一句まとまり文化の日

伊藤　愛子

身に添ふ暮し掌ほどの熊手買ふ
大熊手に上から目線で見下ろされ
一枚づつ肩書落し銀杏裸
牛鍋に蘊蓄ありて浜育ち
すき焼が残る傘寿のクラス会

町田　瀬戸雄二郎

秋彼岸婆のおはぎに阿弥陀の手
声かすれ念仏婆の彼岸果て
葉月潮櫓の音近き漁夫の墓
若和尚の掃除とどくや秋の暮
老いてなほ傍に鍬あり寒に入る

小浜　松島　寛久

秋雲を串刺しにしてジェット行く
一竿に洗濯物と吊し柿
一、二まいひろふわらべの色落葉
遠き地の遠き日の恋雪蛍
女人だけに賜はりしかな花梨の実

大阪　飯塚智恵子

歌忘れ人の名忘れ薄紅葉
鎌倉の冬日あたたか出棺す
はらからの別れひそかに冬の海
若者の雑踏分けて冬の寺
道の辺の残菊白し葬を終ふ

横浜　山岸　弘子

新走りひしほ少少あればよし
取説はわかりにくくて冬仕度
縄のれんくぐれば美き新酒あり
笛の音におかめひよつとこ村祭
神楽坂黒塀茶屋の今年酒

さいたま　臼田　みち

土瓶蒸しに唾を飲み込み茸飯
大合唱の瞳きらきら谷紅葉
杖を友に一歩踏み入る散紅葉
青空を吸ひ込んでゐる紅葉谷
霜月やリュックの中に夢詰めて

福田　育子

令和もうなじみたまふや大嘗祭
真愛しく主なき庭に石蕗の花
やうやうに秋も深まり山荘暮し
茶の花やほこらず清く葉隠れに
見る程に「わび」「さび」愛し白椿

東京　河原　叔子

時雨るるや蓑笠着けし地蔵尊
下り来たる伊香保の磴や村時雨
初時雨細波の立つボート池
時雨去るや角のうどん屋がらんとす
湯の街の行つては返る片時雨

水落　守伊

指切りの子にふりかかる金木犀
スモックの釦ちぐはぐ今朝の冬
飛びかかる様の眼力いぼむしり
筆塚につづく針塚つはの花
秩父音頭を岩にひびかせ紅葉舟

蕨　細井　良子

どこまでも自転車こぐ子初時雨
自由曲に指揮者変身菊日和
ねんりんピックの衣装華やぐ小六月
実と花と赤のみ生くる菊日和
冬さうび家元巡視に緊まる弟子

和歌山　葛城千世子

シュトラウス公園冬の鳥の群れ　宮代　関谷多美子
三世代お宮参りの小春かな
小春日や地元のアート展開催
父と子の眼の先に冬の鷺
石蕗の花咲けば別れのプレリュード

陽に透けて空を染めたる紅葉かな　東京　鈴木　和子
里近き離宮を飾る照紅葉
百段を埋めつくしたる散り紅葉
短日や旅の予習を念入りに
暮早し友とおしゃべりとめどなく

晩秋や早オリオンの昇り来ぬ　さいたま　飯田　忠男
糞餓鬼が地団駄踏んで七五三
敬愛の友の逝かれし末の秋
長き坂登りきれぬも帰り花
大嘗祭を錦木紅葉寿ぎぬ

能面めく街も華やぐ黄落期　吉川　杉浦　理恵
車窓より見る黄落の早回し
黄落や御世を寿ぐファンファーレ
生き方の算段だいこほろ苦し

黄金の田んぼ消え去り冬来る　さいたま　千坂　平通
立冬や高浪のぞむ六角堂
古民家の龍の欄間や隙間風
真打の絶妙の間や冬の寄席

息づかひの残る子規庵萩揺れて　菅原　真理
寒禽の声乱れとぶ里の朝
青空にシーツ広げて秋思ふ
葉から葉へ風をかはして冬の蝶

菊人形我を見据ゑて見栄を切り　和歌山　嶋田　洋子
おみやげは花の移り香菊花展
再会に乱れし心櫨紅葉
世渡りの下手な人生柿落葉

お囃子の顔馴染み減る村祭　春日部　諏訪サヨ子
水浴びの羽の飛沫や鴨清し
小春日や令和寿ぐ五絃琵琶
跳ね橋をくぐり鴨寄る運河べり

冬の田にボール投げ合ふ日曜日　若狭　岡本　祥子
乾し物に取り込む光冬に入る
水難を被れど立つ水仙花
万感の笑顔の即位秋日和

太刀魚を捌く漁師や冬うらら
冬うらら令和記念の伊勢参り
野舞台で琴の合奏文化の日
大空を黒の集団渡り鳥

さいたま　野村　美子

栄華見し木の葉を浴びる道祖神
空高く光を透かし木の葉舞ふ
艶めいて連なる姉妹からすうり
絵画館銀杏黄葉も作品なり

草　加　外村　紀子

踏切の点滅淡き時雨かな
独り居のついつい増ゆるおでん種
葉隠れに侘助の花五つ六つ
侘助の寺の坪庭夕暮るる

東　京　柳父　はる

草の実や花材探しに藪の中
烏瓜納屋の後ろにひつそりと
倒木に絡みつきたる烏瓜
庭園に和服の男女もみぢ狩

さいたま　武田　重子

丸窓の障子も景色枯山水
白髪に赤きセーター「和光」前
張り替へし障子に猫の爪の跡
草の実を付けてもそりと猫帰る

湯浅　和

秋天へスピード上げしエレベーター
天高し最上階のレストラン
本日のデザートは柿畏まる
たかが柿白磁に載りてされど柿

和歌山　宮井美恵子

台風過ぎ真つ青な空と残骸と
倒木にひこばえ見つけ秋の空
厭世観日毎につのる秋の夜
秋のうつただ外に出て深呼吸

東　京　畑宮　栄子

富士映す湖に群れたる冬の鳥
青梅宿今日も小春の晴れ女
田にのこる籾殻つつく冬の鳥
野分中避難警報レベル五に

さいたま　森下美智枝

鴨と鴨向き会ひ親子かも知れず
早々と厨に灯ともす神無月
「ハヤブサ」は地球を目指す神の留守
鴨の声畦をかくして大空へ

山下ユリ子

そば湯飲み終活ノート書き直す
蕎麦掻くを教へる夫は山育ち
見上ぐれば揺らぐ紅葉万華鏡
奥入瀬を下る幾筋散り紅葉

東　京　飯室　夏江

狸並ぶ信楽の里秋うらら　さいたま　綿貫ひさの
鐘の音やゆるる照葉の東山
石仏の在はす砂利道野菊かな
片時雨瀬田の唐橋渡り行く

青空に行列続くみかん狩り　鬼石　加藤ナヲ子
つるバラを思ひ切りよく剪定す
風遊ぶ父のふる里しるし柿
上州の山を動かしからつ風

焼鳥や来年のこと鬼笑ふ　さいたま　長井喜代子
腰と背をぐんと伸ばして小春の日
小春日や三輪車をごみに出し
制服のバス待つ列や小春の日

武家屋敷石蕗の花咲く津和野かな　小駒さち子
塔の上銀杏落葉の黄金色
万両の実たわわなり母の庭
いやいやと走る子が有り七五三

をりとりて夕陽の香る野菊かな　小山　敦子
しぐるるや樹上に残る実の三つ
室の花弱き日差しの日向ぼこ
ホイッスル鳴る高校サッカー冬深む

衣かつぎつるりとびこむ老の口　藤沢　小島喜代子
蔓外へ老人ホームのやぶからし
終仕度まだ咲き残る酔芙蓉
剥製の熊とハグせり雪の宿

鋤焼の講釈長き父の声　川崎　板子由美子
鮟鱇鍋小さき座布団置かれをり
ちやんこ鍋フットワークの軽き男
河豚鍋の伊万里の皿にのせられて

下積みの長き役者や夕紅葉　大阪　遠藤　人美
冬を待つ鍋の厚みの頼もしや
食卓の茶碗夕刊ひび薬

むらさきに郁子の実熟れて冬浅し　さいたま　木村るみ子
ゆかりの地薄日に白き冬桜
大雨に崩れし山や枯木立

冬の伊賀十六連房窯眠る　岡田　宣子
招きゐる信楽焼の狸の眼
短日やスイッチバックする駅に

団欒に狐の影絵白障子　鈴木　藻好
日溜りの冬蝶翅を閉ぢしまま
ふらふらと飛ぶか落つるか冬の蝶

秩父路や巡る札所に初しぐれ
冬ざれや名も無き村のお弔ひ
芋煮鍋つつく手あちらこちらから

さいたま　佐藤　克之

手袋を買ひに来たるか子狐よ
帰り花そこのみ光集めたり
一日を生きる重さや冬の蜂

横山　礼子

焼鳥屋スマホで会話席を待つ
小春日や微笑み返るベビーカー
小春日によちよち歩く孫を追ふ

落合　和枝

庭小春佇む友の絣映ゆ
小春日や五年日記の今日この日
くあくあと空き家に一羽寒烏

越谷　阿部　幸代

大谷（だいや）川神橋の奥濃紅葉
箱根路の関所辺りは薄紅葉
立冬や夕日が更に赤く染め

三郷　沼尾　岳

焼鳥の煙目にしむ赤ちやうちん
入りきたる犬に焼鳥くはへさす
小春日は畑も生き生き元気なり

内田　雅代

インスタ映え朝日の中の紅葉山
雲流れ山の紅葉に影うつす
山見渡せば紅葉と話す我一人

さいたま　緒方みき子

便り出す宛名の里は豊の秋
師を慕ひ桃李成蹊初句会
白秋や母に癖ある国訛

小川　藤間　友二

☆　☆

角川ソフィア文庫

＼ファン必携！／

西東三鬼全句集

貴重な自句自解付き！

「十七文字の魔術師」大胆かつモダンな全句を堪能。

「水枕ガバリと寒い海がある」「中年や遠くみのれる夜の桃」「露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す」反戦やエロス、異国的モチーフや中年感情を詠む感性は無二の魅力を放つ。全五句集に拾遺、初句・季語索引、貴重な自句自解を収録。解説：小林恭二

定価（本体1,240円＋税）ISBN 978-4-04-400326-5

電子書籍も好評発売中！「BOOK☆WALKER」（http://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

KADOKAWA　発行　株式会社KADOKAWA　東京都千代田区富士見2-13-3　TEL.0570-002-301（ナビダイヤル）

角川書店の新レーベル「角川俳句コレクション」創刊！

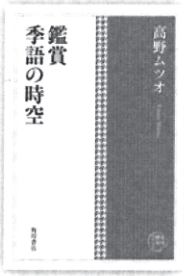
第一弾

鑑賞 季語の時空

高野ムツオ

「燕」「降る雪」「桃の花」……。
季語は時代とともに変化し、
さまざまな読みによって俳句の世界は更新される。
『俳句』人気連載、「俳句の時空」の単行本化！

＼2020年1月30日発売予定／



定価（本体1800円+税）
四六判／並製／256ページ
ISBN978-4-04-884274-7

電子書籍も同時発売！
「BOOK☆WALKER」
（https://bookwalker.jp/）など
電子書店で購入できます。

KADOKAWA　発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
●〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　●TEL.0570-002-301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）

作品評

山本　鬼之介

帰り花米寿の叔母のハイヒール　　野田　静香

なかなか軽妙な俳句である。数十年前まではきりっとした美貌としなやかな肢体で道行く男性の眼を釘付けにしていたであろう明朗闊達な老婦人像が、「叔母」という文字から伝わってくる。

米寿の祝賀の会の会場に、華やかなドレスに往年のハイヒールを履いて颯爽と登場した主賓に、参会者一同『おおー』と歓声を上げたことであろう。ハイヒールにぴたりと焦点を当て、八十八歳という年齢を微塵も感じさせない女性像を印象づけている。季語の「帰り花」が言い得て妙である。

ゐざり機響く里村小六月　　大塚　茂子

「躄機・居座機」と表記する掲句の「ゐざり機」は、別名を「地機・座機・下機・神代機」とも云い、日本及び朝鮮半島で古い時代から使われてきた手織機の一種で、五世紀頃に中国から機織技術が伝わった時に導入された織機とのことである。機織に際し、織り進めるにしたがって座る位置を少しずつ前進させることからこの名が付いたと云う。現在では、結城紬・小千谷縮・越後上布などの高級織物や、日本各地の伝承織物にわずかに使われているようだ。

閑かな秩父の村里に響く躄機の音は、日本の原風景を彷彿させる快いリズムである。

立冬やスカイツリーの影の街　　日髙　徹

推進プロジェクト発足から九年後の二〇一二年五月に開業した世界一高い六三四メートルの電波塔「東京スカイツリー」を取り巻く周辺の街は、電波塔完成後に大きく様変わりしたことであろう。季節やその日の日照条件によって変化する塔の影。その生き物のような影によって街の佇まいも微妙に変化する。立冬の日の澄み切った空に聳え立つ塔の勇姿も然る事ながら、影を主役にしたことが成功の鍵である。

鎚音の絶えて久しき鍛冶祭　　青木　鶴城

この俳句を読んで、文部省唱歌「村の鍛冶屋」の歌詞が口に出た。昔はどの村にも鍛冶屋があった。鎌や鋤鍬などの農機具や、農耕馬の蹄鉄など農村の生活に欠かせぬ物を作る職人であった。彼の大戦後の朝鮮戦争を契機に盛況をきわめたキューポラの街・川口市では今なお毎年「たたら祭」（季語の鍛冶祭・鞴祭に相当する）が開催されている。鍛冶祭を見物して、かつての名画「キューポラのある街」と、何時もど

んよりしていた川口の街並を懐かしんだ作者であった。

薪割りの斧にぽつりと初時雨　　渋谷きいち

太く短い丸太を台にした薪材に、豪快に斧を振り下ろす。真っ二つに割れ飛ぶ薪。山荘の暖炉にたっぷりと薪を入れ、深々と更けゆく夜を楽しもうと、額に滲む汗を拭って斧を振り下ろしていると、手に冷たいものが。季節は秋から冬へと移ってゆく。

小春日や筒音しのび田原坂　　近藤　徹平

避けられぬ運命に身を委ねて花と散った西郷どん。かつての西南戦争の激戦地であった熊本県北西部にある「田原坂」を歩いた作者にとって、想像していたよりも閑かな場所で、歴史書や小説で得ていた往時の戦いの様子を心の中に再現するには持って来いの環境であった。「小六月」の穏やかな季節感が、彼の激動の時代を振り返るのに相応しい。

露寒や奸婦の塚を労りぬ　　正木　萬蝶

奸婦即ち毒婦として実在した人物の中で近世に於て最も有名なのは、明治十二年に、日本で最後の斬首刑に処せられた「高橋お伝」であろうが、その他にも、事件後にいろいろな演芸に脚色された「花井お梅」や猟奇殺人事件で世を賑わした「阿部定」、そして、大戦後の昭和でのホテル日本閣事件の「小林カウ」、平成では、首都圏連続不審死事件で記憶に新しい「木嶋佳苗」など、近代に於ても奸婦的な人物が存在しており、この後も時折こうした女が世を騒がせるであろう。

さて、筆者にとっての興味深い分野で前書が長くなってしまったが、取り上げた句が作者の実体験によるものか創作であるかは関係なく、奸婦といわれる女になるまでの哀しくまたきびしい生い立ちのことや、断ち切り難い男との悪縁などを思いやる気持が「労りぬ」の言葉になったのかと推察する。

糸底に淀みたる陰露寒し　　曲淵　徹雄

「糸底」には「陶土を轆轤から切り離す際に器底に残った糸の痕」「陶磁器の底部」の二つの意味があるが、さて本句の場合はどちらであろうか。工芸品でも家庭で使う実用品でも、陶磁器の底には汚れができるから、それを「淀んだ陰」と暗喩した文学的表現がよかった。

竹籠を編む指太し秋の昼　　保坂　翔太

籠も笊も日常使う器具はプラスチック製になったが、料理店や料亭、蕎麦屋などでは昔ながらの竹で編んだ笊が使われているし、籠も限られた用途で実用的に用いられていると思う。晒した竹を幾筋にも細く裂き、素手で編み込んでゆく職人技は、見ていて惚れ惚れする。永年使ってきた指で、機械では感知できない微妙な感覚を駆使して作業を進めてゆく。全幅の信頼をその太い指が物語っている。

大根やばつさり切れぬ縁あり　河野はるみ

太い大根の頸から葉の部分をばっさりと切った時、視覚と聴覚の両面の快感が走る。ところが、人間界の縁を切るとなると、なかなか思うようにはゆかない。誰しもが、大なり小なり、断ち切りたいと縁を持っていると思うが、いざとなると、ついつい情にほだされて鉾先がにぶってしまう。具象的な季語を据えて心情を吐露した傑作である。

今日の陽に総身ゆだぬる干布団　宮崎チアキ

降り注ぐ太陽の光を存分に吸収した布団での就寝は、まことに快いものである。五体をふわふわの布団に委せきっての睡眠が、「総身ゆだぬる」に籠められている。

野仏のおん手に遊ぶ桐一葉　神田　治江

大きくて重量感あふれる桐の葉である。木から地に落ちるまでの間に、野仏を介在させたところにこの俳句の芸がある。野道に立っている時代がかった石仏であろうから、大仏様のような大きな手であるはずはなく、野仏の掌に乗ったとは考えられないから、野仏の腕に触れて着地したのであろう。至極当り前の情景を、「おん手に遊ぶ」と詠んだ詩心を買う。

古地図手にめぐる本郷小春空　染谷　正信

文京区の本郷界隈には、昔多くの文人・文豪が住んでいた。樋口一葉・森鷗外・石川啄木・夏目漱石・坪内逍遥・宮沢賢治・谷崎潤一郎ほか・枚挙にいとまが無いほどの豪華な顔触れである。旧きを訪ねての町歩きを趣味の一つにしているのであろう作者の様子が、手に取るように伝わってくる俳句だ。往時の年代毎の古地図を数枚持ち、眼を輝かせて探訪している様子が何とも微笑ましい。テクシーには持って来いの日和である。

甦る力を残し枯木立　熊倉千重子

草花や木々の偉大なる生命力に比べて、人間のひ弱さを感じることがある。この俳句の枯木立もまさにその通りの存在感を示している。葉は落ち尽くし、木肌は寒々としているが、幹の中は水で潤い、春を迎えるまでじっと耐えている。自然は偉大である。

対岸の藁焼くけむり冬めきぬ　新　暦文

小川を挟む対岸での藁焼きの煙が立ち上っている。ただそれだけの景色であるが、空へ消えてゆく煙を見ていて、季節の移り変わりを敏感に感じたのであろう。

遡る川の源流冬日和　越田　栄子

山に降る雨や雪が源となって流れをつくり、川となってそ

の果ては河となって海に入る。陽の降り注ぐ冬の一日、ハイキングで上流に沿って歩いている。源流に行き着くのは無理だと分かっているのだが、意識に反して足が動いてゆく。

小町針そのままにして暮早し　　原田　秀子

待針のことであるが、「小町針」と書くとまことに優雅である。針山に刺した沢山の待針や裁縫箱に絎台など、子供の頃に眼にしていた裁縫道具が懐かしく想い出される。これも日本の原風景の一つと言ってよいだろう。裁縫で数カ所に待針を打ち、さあこれから本腰を入れて作業にと思ったが、夕餉の仕度の時間になっていた、という状況である。主婦の日常が伝わってくる。

覗き見る財布の中身一葉忌　　加藤でん治

自分の財布であろうが、いかなる状況下での行為かによって俳句の持ち味が変わってくる。今日は一葉忌かと思いつつ外出の玄関先。特に大きな買物をするつもりは無いが、ふと心配になって財布の中身を確かめたのかと想像する。文筆家として名が出るまで、金に苦労した一葉と、細い糸で繋がっているように感じた。

身に添ふ暮し掌ほどの熊手買ふ　　瀬戸雄二郎

「身の程知らず」という言葉があるが、これを教訓にして、己の財力に適った暮しをすることが肝要なのであろう。本句がそれを教示してくれているように思う。「掌ほど」が実に的確にその気持を表している。

遠き地の遠き日の恋雪蛍　　飯塚智恵子

雪蛍は「綿虫」の傍題として歳時記に載っている。アリマキ科の昆虫という正体を知れば納得するが、識らずに初めて遭遇したらびっくりする神秘的な虫である。綿虫に触発されて、昔日の淡い恋を想いだしたのだろう。今は遠き地であり、遠き人である。

青空を吸ひ込んでゐる紅葉谷　　福田　育子

切り立った渓谷を彩る紅葉の美しさは格別であろう。そして、渓流に映り込む空の青が渓谷美を豊かにしている。「吸ひこんでゐる」が効いている。

真愛しく主なき庭に石蕗の花　　河原　叔子

「真愛(まかな)し」は古語で、「切ないほどいとしい」「かわいらしい」という意味で、万葉集の中の防人の歌でも使われている。この様な雅な詞を、主をなくした家の庭に咲く石蕗の花に修したことに感じ入った。

水琴窟

（水明集十二月号鑑賞）

池田　雅夫

廃屋の屋根皓皓と望の月　　丸屋　詠子

近年、過疎の地域では空き家の数がふえているという。人が住まなくなった家の傷みは早く、傾いたり崩れそうになったりする。仲秋の名月、一年中で最も美しいといわれている。澄みわたる月の遍く光は廃屋の屋根を皓皓と照らしている。

風神の息吹に稲田波打ちぬ　　西幅　公子

黄金色に稔った秋の田を稲田という。垂れた穂は風に揺れ波を打つ。その風を「風神の息吹」とした発想に感心する。強い風に倒れてしまった稲を刈るのは一苦労であるが、「風神の息吹」であるから、それほど強い風ではなさそうだ。

鶏頭の芯までほてりゐたりけり　　佐々木史女

この句の要点は「芯までほてり」にある。インド原産で、茎の頂にニワトリのトサカのように小花を密生させる。真紅が多いが、橙や黄、その他色の混ざったものなどさまざまである。よく観察した上で直感的な表現がいきている。

鵙日和奥の部屋まで開け放ち　　森　和子

閑静な住宅街であろうか。風もなく晴れわたった日に、窓を全開にし奥の部屋まで日の光を差し入れている。キーキーと甲高い鵙の声が部屋を筒抜けているのだろう。「鵙日和」から、日常の生活を窺い知ることができる。共感である。

秋草の丈や閉校記念の碑　　田中　泰子

地方の過疎化の地域では若い世代が居住せず、老人ばかりになっている。子供の数が減り、小中学校は閉校せざるを得ない状況に陥っている。閉校の記念に碑が建てられたものの、草が生い茂っている。賑やかだった頃を思い起こしている。

祭太鼓引つ込み思案と思ひしに　　川島　典虎

「思ひしに」の逆接の関係の使い方に魅せられた。さて、この句は二通りの解釈ができる。一つは、内気でおとなしい児が祭太鼓を聞いて、思いもよらぬ行動をとった。一方、その児がはつらつと太鼓を叩いている、と。祭の楽しさ充分。

抽斗の土鈴ことりと秋の風　　宮井美恵子

秋の風を抽斗の中の「土鈴」で表現するとは意表を突かれた。小生の家に調神社の干支の土鈴十二体が揃っているが、鳴ることがない。土鈴も秋風に吹かれてみたかったのだろう。

藪じらみ取りて散歩の終りとす　佐々木典子

郊外の心地よい風に吹かれながら日課の散歩をしている。道道の草花を愛で、山の景色を楽しんでいる。晩秋になると草花は実を結ぶ。藪じらみやいのこずちなどは動物にくっつき遠くの場所で根を生やす。迷惑がらないゆとりがある。

鵙鳴くやへつぴり腰の丸木橋　平石　睦子

こっけいで楽しい句である。丸木橋は一本の丸太を渡しただけの橋で、不安定で滑りやすい。こわごわ渡っていると、突然、鵙が鳴いたのに驚きバランスを崩してしまった。山村の長閑な情景が浮かぶ。幼い頃の体験に基づく句であろう。

煽ぐたび妣の香りの秋扇　杉浦　理恵

母の形見の扇子。普段から身に付けているだけで落ち着くのだろう。煽ぐたび思い出とともに、母の一言一言が蘇るのだ。風貌も仕草も年々母に似てきた自分を再確認しているのだろう。秋になった安堵感に、母を懐かしみ偲んでいる。

初島を匿ふ秋の沖の波　櫻井よし江

「匿ふ」は「かくまう」と読む。本来の意味は人に知られないように隠すこと。初島を隠すほどの波は非常に大きな波なのだろう。擬人化したところに工夫が見られる。

籾殻に肩を寄せ合ふ紅りんご　畑宮　栄子

その昔、りんごを運搬するときや囲っておくときに、籾殻を木箱に入れて、その中にりんごを入れたものだ。直接箱に入れるとりんご同志がぶつかり合い傷んでしまう。りんご達は籾殻の中で身を寄せ合いながら出番を待っている。

吹く風にやさしき秋の生まれくる　菅原　真理

秋の気配は、こうした何気ない日常の中に感じられる。これが秋だというのではなく、知らず知らず秋と思えることがふえてくる。「生まれくる」に現在進行中であると、読み取ることができる。実感を素直に詠むことの大切さを教わる。

程ほどで済まぬおしゃべり秋桜　遠藤　人美

高浜虚子の句に「コスモスの花吹きしなひ立もどり」がある。時折の強い風に倒れかけ、また立ち直るコスモス。心地よい日射しを浴びての立ち話に際限がなく、コスモスのそれと重なる。女性の心理を秋桜の気品でみごとに美化している。

西瓜積み一輪車押す母の背　岡田　宣子

西瓜の収穫であろう。重い西瓜を一個一個手で運ぶのは難儀なことで、そこで一輪車の出番となる。一輪車は「猫車」ともいう。作業する母の丸い背に注視したところがいい。

鼓笛集

久に逢ふ子も居て夫と年暮るる　神田　治江
継ぎ手なき田畑やつれて冬の雨
動かざる大地を染めて冬茜

臘梅の花咲ききりて臘透けり　佐々木典子
干大根下野（しもつけ）の陽を吸ひつくし
霜柱ざくりと踏んでわが齢

花八手予想もつかぬ通夜の客　大塚　茂子
乾きたる音暖かき落葉径
酉の市商ひ上手口上手

猫と童女の潜り込みをり置炬燵　近藤　徹平
柔道場に少女の気合寒稽古
年の暮電飾に湧く丸の内

山中順子選

冬ぬくし微妙に合はぬ周波数　大槻　瑳蘭
粕汁や硬き体の可動域
丸の内ポインセチアと受付嬢

冬紅葉借景とする美術館　越田　栄子
連なりてべた踏み坂を冬麗
冬晴の砂丘に駱駝のおどけ顔

菊湯掻きさつと広ごる紅の濃さ　菅原　真理
綿虫の白きチュチュ揺れ風に乗る
五十年を語らふ友や冬銀河

石畳風に落葉がロンド舞ふ　熊倉千重子
白菜漬シャキシャキ噛みて食太る
インタビューの仮装走者に冬日射す

山茶花や散り急ぎして路地赤し
月の夜を紅白碧と山茶花よ
白き肌山茶花に染む露天の湯

肩抱かれ慰められて冬紅葉
スモーカーの燻煙しみる冬ごもり
ストーブで炙る鰯やボランティア

冬立つや風が季節を運び来て
数へ日を指折る稚児と一つ風呂
霜柱グリーンに傾斜つけにけり

秋の虹皇女の十二単かな
烏瓜ネックレスの如木を飾り
穭田に遊ぶ術後の夫と二人

小春日和猫の居さうな路地のぞく
冬満月猫の目玉は発光す
数へ日や追ひ立てられて猫隠る

侘助や昭和一桁令和も生く
そそと咲くも侘助無言の力(りき)くれる
ゆつくりと生きて今あり柚子湯かな

河野はるみ

音たてて枯葉円舞の並木路
冬ばらの色すぐれども棘多し
ほのぼのと咲きし山茶花散り急ぐ

塩野　久子

牡蠣を食む海神多き漁師町
夜の部のはねて見上ぐる冬銀河
数へ日や手抜き上手も生きる術

渋谷きいち

受話器から飛び出す笑ひ年の暮
花器の口被ふかのやうにポインセチア
忘年の演目多し時間切れ

笹本　啓子

戸一枚閉めずにおくや初しぐれ
金柑が頬ふくらまし庭を掃く
大くさめ話の接ぎ穂忘れたり

加藤でん治

思ひ出が重なり合ふ日シクラメン
一枝の山茶花会話に花が咲く
暗記する力衰へ街師走

葛城千世子

☆　☆

榊原　聰子

川島　典虎

下川　光子

小杉　自子

河原　叔子

鼓笛集作品評

山中　順子

久に逢ふ子も居て夫と年暮るる
継ぎ手なき田畑やつれて冬の雨

神田　治江

家族が集まるのは盆と正月と忌日の時ぐらいと思う。昔は一つ屋根に暮していたが今は各自の生活を尊重するのか、我が子でも一年に数えるほどしか会えない。この一句は久しぶりに会った子と、しかも夫も加わるという別に珍しくもない事を感慨深く年の暮を味わっている。妻であり母である作者の幸の極地の深い作品である。

二句目も家族の微妙な絆がやつれた畑によって現代の世相を表現している。

干大根下野の陽を吸ひつくし

佐々木典子

作者は栃木県に住んでいる。農村の風景が直線に伝わってくる。そして大根のほどよい撓りが下野の陽を吸い無欲な句に仕上っている。

私の好きな一句（自句自解）

石川　理恵

回覧板を届けるだけの春ショール

我が家では、夕刊を取るタイミングで回覧板に気付くことが多い。大したお知らせは入っておらず（すみません！）寒いし、隣家に回すのは明日でも良いかとも思う。が、置いておくと気になるので、一枚羽織って思い切って外に出る。

日常をそのまま詠んだ捻りの無い句だが、思いがけず点が集まって嬉しかった。

鼓笛集の書き方

○俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
○二百字詰原稿用紙をお使い下さい。
○右上欄外に「鼓笛集」と朱書きして下さい。

編集部

句集喝采

近藤　徹平

◆島　雅子「もりあをがへる」　朔出版

著者略歴　昭和十五年神戸市生。平成十年「門」入会。平成十九年句集「土笛」上梓。平成二十一年「門」賞受賞。第一回清瀬市石田波郷俳句大会大賞受賞。平成二十四年第四回清瀬市同賞受賞。「門」同人、「ににん」同人。俳人協会会員。

日本を濯ぎて蟬の哭きにけり
命名は風吹みどりの風がすぐ
あをもりのもりあをがへるあをがへる

一句を句集の帯に掲げ「時空を超える表現が出来た時、どんな喜びに出会えるか、俳句形式を信じて詠み続けたい」と、俳句への思いを記す。二句は句集の表紙を飾る絵を描いた孫の名「風吹」に因んだ句。既に完成されている幻想的な絵だ。三句は句集の表題で、著者に「もりあをがへる」の名を教えてくれたチェコ生まれの少年とか、孫なのかなとふと想像する。

短夜を覚めをる癌よ俺は寝る
つくつくし被爆認定死後届く
後の世を何に遊ばんほーほけきよ
パラドックス重ねかさねて葱を抜く

著者は医師であった最愛の夫が「土笛」上梓後に旅立たれた。病気は癌だったから看病は大変だったと推察する。一句は看病末期。二句は何故か亡くなって後に広島原爆被災者の認定通知があった際の句。三句、四句は愛する人を失って後も、さらに一層俳句形式を信じて世界を広げようとする心意気が伝わってくる句。

◆河瀬俊彦「箱眼鏡」　ふらんす堂

著者略歴　昭和十八年高松市生。平成二十年退職を契機に「遠嶺」入会。平成二十二年小澤主宰逝去による「遠嶺」終刊の際、会員による「爽樹」創刊に参画。現在「爽樹」幹事長。俳人協会会員。

初凪の島より島へ郵便船
海峡の渦の底より桜鯛
深きより海神のこゑ箱眼鏡
棹させば星座となりぬ夜光虫

著者は幼少の頃、父君が瀬戸内女木島の中学校教頭に、母堂が小学校教諭に赴任されたので、自然豊かな小島で少年期を過ごした。掲句は何れも島の暮らしから生まれた。三句は標題とした句。

父と子の無言のままの日向ぼこ
桑の実やまぶしき母の割烹着
野に出でて妻は少女や土筆摘む
兜虫吾子はいつしか父となり

両親のもとで成長し、またとなき伴侶を得て一家をなし、その子らも巣立っていく様を、本句集の中で丁寧に披露された。

村長は俺だと蟇の出迎ふる
スランプは飛躍の兆し冬木の芽
水郷の舟に詩人となる月夜
団栗のやがて大樹の尖りかな

意欲ますますの俳人、次の句集へ意気軒昂と拝察した。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木　和子
境　延昭　報

先導はツシマヤマネコ冬の朝　節　代
冬館シャム猫抱きて迎へらる　治　子
枯蟷螂に嬲られてゐる仔猫かな　由紀子
膝に乗る猫の息まで白き朝　大場　順　子
腕白が猫を引き出す掘炬燵　徹　平
猫と童女の潜り込みたる置炬燵　〃
野良猫の意地の眼差し冬の路地　喜　恵

――以上特選

葛湯溶く胸の閊へのとけるまで　光　弥
炬燵の猫真ん中に寝て蹴飛ばされ　光　子
お転婆も正座崩さず葛湯吹く　節　代
猫の声消されし闇や虎落笛　チアキ
こんな時間に一寸小腹がくず湯かな　和　葉
葛湯吹く花のやうなる口すぼめ　治　子
いろり端猫と競ひし上座かな　はるみ
くず湯飲み異存なぞ無き女帝論　延　昭
葛湯啜る喉元すぎてなほ熱し　喜　恵
姫椿尼僧に戯るる白き猫　マスミ
色とりどりの葛湯の味も七変化　理　恵
臥す母に一匙づつのくず湯かな　大場　順　子
歌ひとつ歌ひてくず湯冷ましけり　由紀子
猫のぞく鳥籠隠す冬最中　愛　子
茶の花の垣根越しなる猫談義　和　子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田　絹映　報

小春日や優先席を譲られる　稔
初霜やゆうべの星の音を踏む　竺　仙
瞳見合せ初霜さくと踏む母子　〃
初霜や新聞受けに指の跡　淑　江
初霜や静かに変はる山の色　敏　江

――以上特選

産土の過疎の憂ひや冬銀河　玲　子
初霜や心の解けていくやうな　鶴　城
黄落や並木の先に時計台　稔
初霜や仕舞ひ忘れの三輪車　昭　子
初霜や始発列車の遠き音　昌　弘
冬晴れをスカイツリーの独り占め　禮　子
朝早し銀杏落葉を掃く老僧　敏　江
初霜や子等がはしやいで踏みつぶす　寿　恵
初霜や凪の川面に舫ひ船　峰　雄
初霜や褐色ランナー競ふ道　登志子
倍速で過ごす毎日十二月　陽　子
初霜や両手で包むスープ碗　淑　江
袴着の運動靴で砂利を蹴る　竺　仙
初霜やカチリと止るオルゴール　みどり
初霜が下りましたねとごあいさつ　絹　映

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵　徹雄　報

干したての毛布のやうな人に逢ふ　清
凩や一の鳥居の注連ほつる　徹　雄
置きざりの松毬一つ冬の椅子　〃
しののめに恋尽くしてや浮寝鳥　萬　蝶
浮寝鳥山借景のそば処　みどり
水よりも深く昏れをり浮寝鳥　〃
散りぢりにゐて一陣の浮寝鳥　康　世
声嗄れの鴉飛び立つ枯野原　祥　絵
叡山の影の余白に浮寝鳥　昇

一花かな空との対話冬の薔薇　岡野順子
渡り来て波の間に間に浮寝鳥　喜久
浮寝鳥水の惑星ゆれ止まず　大場順子
水中に赤き疵あと浮寝鳥　理恵
逆さ富士を褥にしたる浮寝鳥　康世
むさし野の寒の葬列じやらんぽん　清
赤い服は着ない約束ポインセチア　萬蝶
しんしんと夜のさざ波浮寝鳥　雅夫
水影に倦んで微睡む浮寝鳥　徹雄
放楽の蜂の執着石蕗の花　祥絵
浮寝鳥石垣づたひにつういつい　みどり
指一本板場へかざしお燗酒　昇

——以上特選

第四例会（浦和）

石井喜恵
境延昭報

日当りて土膨よかに葱の畝　玲子
葱畑坂東声に呼ばれけり　光子
吊革に並ぶ手袋のファッションショー　寛治
手袋の拳固める門出の子　昇
葱を買ふ関東ロームの泥のまま　延昭
店先の深谷葱ツイギーの脚　修
抽出しに手編の手袋恋初め　翔太
手袋にさよならの指仕舞ひけり　喜恵

——以上特選

オートバイの革手袋は黒光り　修
手袋脱ぎ二礼二拍手あどけなし　マスミ
待合せペアの手袋高々と　暦文
ステンレスの剛プラチナの優葱の束　光弥
上州の風や下仁田葱太し　順子
白ねぎの一本焼きの鎮守かな　翔太
手袋のままの握手よご令室　延昭
不揃ひの手打ちうどんや葱刻む　恵子
ふるさとや背戸の傍の囲ひ葱　昇
鐘一打手袋を脱ぎ合掌す　玲子
煮ばうたうの葱香しや道の駅　でん治
枝先に赤き手袋日の暮るる　光子
葱届く深谷の土の温もりも　寛治

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

沖波の荒み齋す鰤大漁　萬二郎
寒鰤や予て用意の大漁旗　〃
嫁がせてあとより送る祝鰤　水尾
初雪や新しき家祝ふかと　美佐尾
初雪やホームに立ちてシネマのやう　〃
寒鰤や浜の女房活気づく　義子
初雪や文士の顔で墨を磨る　はるみ
窓ごしの初雪ながめ恋いづこ　〃

——以上特選

初雪や火花八方鉄工夫　萬二郎
鰤頭たたせて猛るコンロの火　水尾
定置網鰤と一緒に夕日入れ　美佐尾
鰤捌く男にピアス輝けり　義子
鰤かまを塩焼にして男飯　はるみ
鰤かま焼皿をはみ出す鰭の焦げ　朝子
初雪や街灯照らす闇に降る　理恵
初雪に払暁の庭静まれり　佐江

婦人句会（浦和）

西山貴美子報

十一月分
気位を棄て切つて散る冬のばら　愛子
恙なく生きて偕老冬のばら　〃
踏ん切りのつきて襖を閉めにける　さく子
襖閉める静かに静かにの一語です　順子
冬薔薇衿元かたき母なりし　由紀子
間仕切りの襖の表裏和と洋に　ひさの
迷ひ神にひと言もらふ襖越し　貴美子
冬薔薇の棘隠しても隠しても　〃

——以上特選

地謡の一扇冬のばらを指す　さく子
残されて一花この世の冬の薔薇　順子
襖越しに夫と会話す夜の帷　愛子
襖ごしああ・うう・お茶と夫の云ふ　由紀子
冬の薔薇思ひ通りに開けずに　ひさの
冬の薔薇一輪なれど炎上す　貴美子

婦人句会（浦和）　西山貴美子 報

十二月分

満月も担いで帰る熊手市　さく子
大熊手担ぎ揚揚三の酉　順　子
しめ雑炊鯛の目玉も入れたろか　由紀子
酉の市小さき熊手も百万両　ひさの
あるがままに生きて転んで酉の市　貴美子
残り物の菜の際やかに鍋雑炊　〃

――以上特選

欲しがらぬ顔して値切る酉の市　さく子
地下鉄を出てひと、人、人よ一の酉　順　子
年末の風物詩となる酉の市　愛　子
鉄鍋に添へる木杓子菜雑炊　由紀子
お仕舞はおじやに納め鍋奉行　ひさの
焼牡蠣や松島の景煙らせむ　理　恵

――以上特選

牡蠣の山殻と知らずや鷗群る　理　恵
瀬戸内の夕陽を浴びて牡蠣筏　俊　晴
到来の牡蠣に俄の牡蠣割女　萬　蝶
母の里牡蠣鍋囲み尽きぬ夜　儀　勝
酢牡蠣吸ふ閃光走る港町　倭　子
高くはないが深い空堀返り花　月　を
若さとは尽きぬ欲望牡蠣を剥く　鶴　城
土手造り家伝有る無し牡蠣の鍋　はるみ
風荒るる今宵はやはり牡蠣雑炊　佐　江
鰭酒は魔法の酒か下戸酔はす　知　子
牡蠣焼きて潮の青さを煮つめたり　千　春
海女小屋の牡蠣食べ放題軍手はめ　慶　子
不忍の水の残照牡蠣啜る　ひろこ

若松句会（京橋）　菊池ひろこ　石田慶子 報

冬の蝶鏡を出入りしてをりぬ　月　を
土手焼を恋ふ輩酒乞うてをる　〃
口八丁手八丁の牡蠣割女　佐　江
酢牡蠣殻重ぬるほどに愛深む　〃
転職へ秘めたる思ひ牡蠣の殻　鶴　城
鍋の牡蠣ちぢむ佳境の恋話　千　春
参観日生臭きまま牡蠣割女　萬　蝶

☆　☆

水明発行所受付時間

曜　日：（月・水・金）

時　間：午後１時から午後５時

（火・木・土・日・祭日は休み）

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

各地句会

水明小川句会（小川）

赤き実の鈴生りが良し冬はじめ　和子
惜しまれて逝く人のあり枇杷の花　みや
過ぎし日を惜しんでも無駄冬日和　むら子
母逝きて拠り所なき年の暮　栄子
句の友と集ふ幸せ年暮るる　きよ子
年の夜や鐘の数まで共白髪　綾子
茫々と歩む人あり年の暮　武
年末の手当の入る夢覚めて　雅則
惜別の防人の碑や十二月　藤十郎

俳句の手ほどき（岩槻）

近松忌奥の間といふ開かずの間　かつ子
橋渡る相合傘や近松忌　水尾
道標なき道行くや枯柳　倭子
それ故に二人は添へぬ近松忌　美佐尾
世話物に涙霞や近松忌　義子
近松忌師の菩提寺に比翼塚　佐江
解体屋の外す表札花柊　ます美
亡妻の面影さがす近松忌　慶子
近松忌太棹にはる一の糸　延昭
渡し待つ草履と雪駄枯柳　徹平
手探りで灯す蝋燭近松忌　翔太
柔らかく笑みの近りし冬日和　忠男
木偶が抱く木偶も泣きをり冬柳　順子

雛の会（浦和）

ぼんやりとはりついてゐる冬の蠅　燈女
牡蠣すすり胸に納めておく言葉　佐江
茶の花や半音低き子守唄　喜恵
牡蠣の鍋部屋中満たす香りかな　チアキ
根深汁今年は世話にならぬやう　輝翠
陽を浴びて庭の一角石蕗の花　むら子
磴あらば寺と思ひぬ初時雨　かつ子

珊瑚の会（浦和）

聖夜眠らぬ新宿渋谷池袋　広子
改札出で聖樹の森に紛れ込む　和葉
廻るまはるクリスマスの飴細工　かつ子
暮れ切らぬ空は喪の色虎落笛　喜恵
駅ピアノサンタも交り音紡ぐ　マスミ
送電線山から山へ虎落笛　水尾
虎落笛鳥影遥かオホーツク　昇
虎落笛耳聡くなり仕舞風呂　恵子
病院を囲む聖樹にロシア歌　光子
虎落笛をんな一人泣きに来る　史代
胸板をゆさぶり過ぐる虎落笛　和子
仏教徒もそ知らぬ顔で祝聖夜　節代

野菊の会（与野）

冬の日に透く桃色の猫の耳　和子
数へ日やぐいと縛りぬ古雑誌　清子
冬満月猫のまなざし殺気帯ぶ　光子
遺されし手袋の五指語りたる　美代子

神戸大池水明句会（神戸）

虎落笛「言ふこと聞かねー子は居ねが！」　早苗
朝の気の申し分なき冬日和　礼子
冬山の木々の肋骨風走る　千津子
虎落笛六甲連山闇深し　玲子

阪神合同忘年句会（神戸）

埋み火や聖者は音を消してくる　ゆら女
枯菊となりて色増す気概かな　洋子
冬うらら上りホームを歩く猫　早苗
日々一歩地道に前へ木の葉髪　礼子
北国路軒の深さや吊り干菜　千津子
顔見世の孝夫のまねきするすると　玲子

ミモザの会（横浜）

ポインセチアの色もらひたしルージュ買ふ　知子
鈴の音やポインセチアの色は赤　亜弥子
冬晴れやこども歌舞伎の抜くる声　玲子
ノートルダムノエルヘブライ語の朗朗　萬蝶
木枯しや手の冷たきは優しき人　栄子
告白の少年ポインセチア抱く　慶子
十二月八日ポインセチアの白を買ふ　史代
ポインセチア「ケーキの予約受付中」　千春

水明鬼石句会（鬼石）

掘炬燵兄の定位置空いたまま　和子
初氷ペロリと長き犬の舌　聡子
しんがりにポインセチアよ花ごよみ　紀子
満月の夜は淋しき十二月　ナオ子

水明大阪俳句会（守口）

電飾の骨しらじらと冬の暁　ゆら女
閉ざされしままの実家やお茶の花　洋子
土石流あとを顕に山眠る　ヒサ子
冬の蜂ムサシと呼んで見送れり　智恵子
ゴンドラに揺られてサンタ窓を拭く　卓也
潤目焼く右向け右を裏返し　人美
置き呉るる留守居の昼餉菊の縁　和子
羽搏いて未だ整はず鴨の陣　敦子

和歌山水明句会（和歌山）

山は雪ほつこり灯す古障子　和子
城の案内は紙の甲冑帰り花　道子
紅葉散る天下御免のカメラマン　千枝子
年の暮言はれて何ぼと受話器置く　千世子
はふはふと舌を転がせ大根焚　満耶子
年の暮無駄口いはぬ淑女かな　きわゑ
銀杏落葉踏みて我が身の軽きかな　美恵子
小児科に夢を担ぎてサンタ来る　洋子
御座船の水脈はむらさき小六月　廸代

新樹の会（浦和）

絨毯にマネキン転ぶガラス窓　鶴城
冬空やこの葉散らして大檜　清吉
餌を撒けば跳ぶがごとくに鴨来る　平通
絨毯の手織りの作業迷路めく　京子
緞通の重々しさや義父の部屋　韶子
寒空を貫くほどに野鳥鳴く　紅花
冬夕焼霊峰富士の影明か　徹
払暁の薄氷にさて手を触れむ　でん治

若狭水明会（若狭）

一冊に積る星霜古日記　初花
赤蕪のいよいよ赤き酢漬かな　和風
空白の続く日のあり古日記　白鷺
平成から令和元年日記果つ　冬至
一年は手帳で足りる古日記　保人
虎落笛「うん」と言ふ人そばに居て　鼓
空白の一週間や古日記　郁子
妻が居るだけで好日かぶら汁　寛久
読点で止まりし筆や虎落笛　ことは
赤蕪女所帯の甘酢漬け　祥子
爪痕の木木の哀しみ虎落笛　想子

花衣の会（浦和）

徘徊る「ねむの木の庭」冬薔薇　みよ
急ぎ来る江戸褄の人石蕗の花　京子
寒暁や富士はほんのり紅さして　みち
天使かと惑ふ白鳥水に置く　峯雄
羽撃きの音の重さや大白鳥　眞臣
老の秋心の糧となる句会　治
白鳥来て湖面ざはめく一頻り　章嘉

たかんな俳句会（川口）

肩ふるる物みな柔し冬木の芽　義子
火を落とし神を迎ふる鍛冶祭　妃実子
真紅の実異彩を放つ冬の園　鶴城
冬の庭一人グルメのオムライス　真知子
蒼天にはや躍動の冬木の芽　水尾
夢叶ふ日を数へつつ冬木の芽　静香

かわせみ句会（浦和）

リハビリのあとの湯豆腐ほかほかと　敏子
湯豆腐や金婚の夫と嵯峨野路に　智子
衿立ててショートカットの師走かな　順子
湯豆腐や古都を味はふ南禅寺　良枝
湯豆腐のはらほろひれと口の中　信子
湯豆腐の湯気の向かふに父母の顔　保子
湯豆腐を益子小鉢にふんはりと　友子
歯の治療連日続く師走かな　治郎
極月や落日の中足早に　育子

青葉の会（浦和）

寒昴峠越えれば城下町　美子
遠吠えで犬が知らせる焼芋屋　啓子
姉さん被りして母偲ぶ年用意　公子
オリオンへ最終章の祈りかな　洋子
寒の入大桟橋が船を待つ　和子
焼諸屋秋田なまりを響かせて　輝翠

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

山茶花の散るや戦没慰霊の碑　延昭
童顔のいよいよ丸く冬帽子　俊晴
嫁がせて目深にかぶる冬帽子　美枝子
たまご酒尖りし心丸くなり　倶子
玉子酒日課は一日一万歩　正信
些と傾げ女優気取りの冬帽子　佳代子
山茶花の垣に言伝て結び置く　光子
喉痛し母の薬は玉子酒　淑子
散り支度して山茶花の盛りなり　昇

野ばらの会（浦和）

北斗七星手に届くかに湯ざめせり　和子
凩や傾ぐ道標傾ぎ読む　治江
すは湯ざめ紅茶濃いめにブランデー　秀子
夜更しの足の裏より湯ざめせり　栄子
木枯や心して立つ杖の人　茂子
木枯や架け替へられし橋渡る　夏江
説明書理解半ばで湯ざめかな　みき子

櫻蔭句会（浦和）

酉の市恵比須を担ぐ恵比須顔　由紀子
潮風にたたかれ凛と石蕗の花　茂子
鷲の幸をかつこむ酉の市　公子
B級グルメの屋台が並ぶ酉の市　美子
石蕗の花一家支へし母のこと　美紗子
大嘗宮裏に煌めく石蕗の花　美智枝
石蕗の花雨の横山大観邸　多美子
寂れ行く農家に根張る石蕗の花　幸代
大熊手掲げる男誇らしげ　真理
裏木戸に石蕗の明かりの昏れ残る　マスミ

芽吹句会（浦和）

枯葦や帝釈天へ渡し船　玲子
冬月の軌跡を追ふも異郷の窓　ひろこ
川岸を茫と縁取り蘆枯るる　富子
喧騒の街の灯遠く冬の月　チアキ
枯葦原あまた行き交ふ鳥礫　朝子
人にそれぞれ背負ふものあり冬の月　千重子
荒川を渡る終電月冴ゆる　徹

水明熊谷句会（熊谷）

クリスマス私にもあるプレゼント　燈女
齢重ね無欲もたのしクリスマス　治江
聖夜かな遊歩道行くペアルック　裕子
ともしびを持ちて入場聖夜劇　栄子
サンタクロースの役を果して縄暖簾　徹平
老妻と手作りケーキイブの夜　正行
ご機嫌な顔が一番年の暮　和子
キャンドルの火影幽かに聖夜果つ　秀子
仮の夜も男は辛しクリスマス　藤十郎
癒え難きものを抱きて年の暮　茂子

けやきの会（東京）

出棺の余韻しづまり散紅葉　祥絵
追分宿曲り人出の暮の市　由美
大道芸果つ喝采と落葉浴び　康世

きざきサークル（浦和）

凍て星や「光年」といふ師の句集　俱子
静寂な時の流れや冬の星　かつ子
数へ日や手抜き上手も生きる術　啓子
冬の星ひしめきあひて第九かな　喜代子
傾いた祠の上に冬の星　千種
夫とハグガラスにうつし冬の星　タイ
すぐそこに忘れ物有り冬の星　和枝
天窓のある暮し好き冬の星　和子

あゆみの会（浦和）

のど奥に生牡蠣するり磯の香が　和
牡蠣焼の潮の香りや瀬戸の島　山遊
牡蠣を食む海神多き漁師町　圭子
一部屋に男女雑魚寝のスキー宿　重子
牡蠣割女惚れし男の話など　朋子
極上のフランスワイン牡蠣啜る　藻好

鶴川山百合句会（鶴川）

太ねぎの白く光るよ鍋のきは　八洲男
軋む階段昇つて胡座鮟鱇鍋　雄二郎
やみ鍋や草鞋さるまたオジサンズラブ　月を
河豚汁九州訛の泣き上戸　喜久
牛鍋の匂ふ奥行き深き店　史代
焚火囲む炎の向こう側に兄　広子
寄せ鍋の締めは讃岐の太うどん　知子
すき焼きの講釈長し父の声　由美子
煙草買ふときコンビニおでんの誘惑　千春
柿たわわ「こども一一〇番の家」　理恵
ベンチャーズ聴きてひとりのおでん酒　玲子

山茶花（浦和）

初時雨父がふるまふ豆腐汁　清一
旅籠屋の朽ちし格子戸初時雨　泰子
茶の花咲く作務の尼僧に遠会釈　マスミ
セラピーの講習帰り初時雨　美江子
旅先の琵琶湖大橋初時雨　しず子
泣きさうな空からやはり初時雨　光子
風吹きて雲足早き初しぐれ　嶺一
茶の花の薄日を浴びてほつこりと　綾子

大宮読売俳句教室（大宮）

レジ横の暫し気になるおでんかな　卓郎
終電待つちょいとその間のおでん酒　弘夫
枯蓮やここにもおはす弁財天　正信
おでんの日妻も燗酒楽しめり　典子
おでん食ぶ忽ち知己となりにけり　寛治
真似てみる母のおでんは味はへぬ　紀子
ふつふつと人の恋しきおでん鍋　サヨ子
帰路急ぐ家々の灯やおでんの香　利子
片隅に我と似た人おでん酒　徹雄
枯蓮田まるで満身創痍かな　君夫
串刺しのおでんが癒す深き味　治子
おでん屋の話し上手にまあ一献　翔太
金泥と見ゆ対岸の枯蓮田　順子

柿の木塾（浦和）

畳屋の寺に来てゐる冬至かな　かつ子
音読の急に間遠に炬燵の子　恵子
掘炬燵恋の予感の膝がしら　昇
金婚の今も現役古炬燵　俊晴
膝に猫共に目を閉づ置炬燵　和葉
仏壇の中まで射して冬至の陽　水尾
冬至の夜治ると信じ葛根湯　節代
貸切りの御一行様冬至宿　清
冬至かな鶏の啄む庭の土　和子

りそな俳句会（浦和）

「鯛焼は粒餡が好き」母百寿　徹
鯛焼や主義も主張も無き平和　暦文
朝起きて蒲団蹴散らす男意気　勲
干すほどに軽き煎餅蒲団かな　雅夫
鯛焼くん海を見つめてひと吐息　克之
手土産の鯛焼うろこに破れ紙　久美子
蒲団の肩直して寝まる親心　萬二郎
蒲団被り禁断のネットサーフィンす　建治郎
干蒲団負けし無念も叩き出す　マスミ

蝌蚪の会（浦和）

冬日向窓ガラスふく手のはやさ　さち子
ポケットに飴玉ひとつ冬の星　元美
一鉢のポインセチアと過ごしけり　宣子
一つ星凍る伽藍に僧の息　礼子
山頂の鐘鳴り響き冬夕焼　るみ子
一杯のワインの余韻年の暮　鶴城
気が付かぬままに数年冬銀河　月を

光が丘俳句教室（東京）

半眼は仏の境地日向ぼこ　守伊
冬の夜や多勢でこその鍋料理　はる
看取てふ二人の時間日向ぼこ　康子
焼き芋を子らが手にして温まる　史子
雪吊りの撓みて空の重さかな　野人
ことごとく裏目に出る日おでん酒　理恵

花ごよみ句会（浦和）

雲一つ無き青空を鷹の舞ふ　和子
冠雪の冨士今日は無く冨士見坂　君子
煤逃の無愛想なる漢かな　ユリ子

芙蓉句会（浦和）

山眠る老いし年輪矢の如し　正子
山襞を銀色に染め山眠る　道子
零れそな星を支へて山眠る　税子
粧ひを解いて眠れる田舎富士　仁
郵便夫どこまで配る冬の山　知加
石段のごと削られし山眠る　美子

櫟の会（浦和）

猫の目のうつろうとうと冬日向　克之
米寿まで女医を貫き寒椿　朋子
病む友にメールで贈る寒椿　富子
さきたまの古墳の群に冬日落つ　彰二
表札の残りし空家寒椿　千重子
漂ようて雲は旅人冬椿　萬二郎
ピアノの音洩れ来る垣や寒椿　裕之
迷ひ込む粋な路地裏寒椿　治子

円卓の会（浦和）

千姫のやうな山茶花にはたづみ　翔太
告ぐる日のポインセチヤの斑かな　瑳蘭
一幅の墨絵のごとし冬の園　徹
数へ日を五指に納める令和かな　月を
着ぶくれて連れはミシュランマンのごと　鶴城

皐月の会（浦和）

湯けむりに迎へられたる冬帽子　静香
湯豆腐や二人家族の外は雨　孝麿
花一枝床に活き活き年送る　カズ子
ポチ袋椀も揃へて行く年よ　久子
湯豆腐やなまり優しき南禅寺　暦文
行く年の駅アナウンス遅延事故　きいち

水明松本句会（松本）

うすく引く誰が焚くけむり紅葉山　恒子
窓ごしの日差しはやさしシクラメン　陽子
プレゼントもらつて文句クリスマス　マリス
あと一つ思ひ巡らす木守柿　玲子
冬座敷ふるぶ緞子の琴ぶくろ　寿子

☆　☆

水明創刊 90 周年
記念祝賀会・全国大会のご案内

■記念全国大会

日　　時　令和２年６月 29 日（月）
　　受付開始９時 30 分　開会 10 時　閉会 15 時 30 分
会　　場　ロイヤルパインズホテル浦和
　　４階「ロイヤルプリンセスＡ・Ｂ」
　　〒 330-0062　さいたま市浦和区仲町２- ５- １☎ 048-827-1111
行　　事　水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞、記念特別作品の授賞、新誌友紹介者の表彰、新季音同人、新同人の紹介、兼題入選句の発表・受賞・講評など

■記念祝賀会

日　　時　令和２年６月 29 日（月）
受付開始　15 時 30 分　開会 16 時　閉会 19 時
会　　場　ロイヤルパインズホテル浦和
　　４階「ロイヤルクラウンＡ」（住所、☎は全国大会に同じ）
行　　事　来賓挨拶、俳壇著名人のビデオメッセージ、大福引大会など

■参 加 費（５年前の水明 85 周年記念祝賀会・全国大会と同額）
　　記念全国大会・祝賀会　25,000 円
　　記念全国大会のみ　　8,000 円
　　記念祝賀会のみ　　20,000 円

■宿泊斡旋

宿 泊 日　令和２年６月 28 日（日）および 29 日（月）
宿 泊 先　ロイヤルパインズホテル浦和
宿 泊 費　シングル　11,500 円　ツイン　10,500 円× 2 = 21,000 円
　　＊ともに朝食・消費税・サービス料込み
　　＊料金は令和元年７月現在のもので、今後変更の可能性あり
　　＊支払いはチェックイン時にホテルへ直接お願いします

■申込み・締切　未定（追って詳細をお知らせします）

◎滅多に無い貴重な機会です。ベテランはもとより、新入会員の方々もお誘い合わせて多数ご参加下さい。みんなの力で祝賀会・大会を盛り上げましょう。

水明創刊 90 周年記念事業　実行委員長

水明創刊 90 周年
記念特別作品募集

記念祝賀会・記念全国大会のご案内の通り、水明創刊 90 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ、評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外はどなたでも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は６月 29 日の記念全国大会で行います。

応　募　要　領

【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。

【応募部門】 ①俳句作品：30 句（400 字詰原稿用紙を使用）
②エッセイ：１ 篇（400 字詰原稿用紙６枚程度）
③評　　論：１ 篇（400 字詰原稿用紙 12 枚程度）
◆原稿用紙は各部門ともに、タテ書き用Ｂ４判 400 字詰を使うこと。
◆文字は、選考委員が容易に判読できるよう楷書で丁寧に書くこと。ワープロやパソコン入力による原稿も可。
◆いずれも未発表作品に限る。（水明誌および外部に発表した作品は不可）
◆最初のページの１行目に表題（タイトル）を書き、その下に姓名（俳号）を書く。
◆複数部門への応募も可。

【応募締切】 令和２年３月 31 日

【作品送付先】 〒 339-0067　さいたま市岩槻区西町５－６－38
山中順子 宛　＊「記念特別作品」と朱書する。

【選考委員】 主宰・山中順子・星野和葉・境延昭・五明昇・網野月を
◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、授賞者を決定します。

【授　　賞】 俳句・エッセイ・評論それぞれの部門に授賞します。
正賞：各部門とも賞状と副賞５万円
準賞：各部門とも賞状と副賞２万円

◎ご質問・お問い合わせ
実行委員長　山中順子（☎ 048-756-1253）へお願いします。

水明創刊 90 周年記念事業　実行委員長

水明の記事掲載他誌より転載

『獺祭』十一月号 受贈俳誌鑑賞

粟村　勝美

水明　2019年9月号（通巻1068号）

明治五年長谷川かな女が浦和にて創刊。星野光二を継いで山本鬼之介が5代目の主宰。月刊。有季定型。皮膚感覚で風土豊かな句を詠む。

主宰作品「宵宮」より

月 鉾 に 月 が 応 ふ る 街 の 辻

祇園会や女ひと言「好かんたこ」

与 の 膳 の 夏 の 料 理 の 迷 ひ 箸

京都祇園会での軽妙な描写が生き生きと眼前に浮かぶ。

水明全国大会が報じられている。

兼題（団扇、紫陽花、音）入選句主宰選

天　あぢさゐや江戸の名残の佃島　境　延昭

地　ハープ鳴るやをどりいでたる黒揚羽　大橋　廸代

人　あざやかに一座を仕切る江戸団扇　五明　昇

「水明全国大会の記」で第一部を山中順子、第二部を五明昇が分担執筆している。盛大に催された様子が伝わる。

季音「雪・月・花」の同人作品群は印象深い作品群である。

「わたしの近詠二句」として新季音同人が自句の周辺を語っている。

主宰選の「水明集」には主宰の作品評が掲載されている。令和元年度の「水明夏行」三日間の作品が紹介されている。

水明創刊90周年記念祝賀会・全国大会（令和二年六月）の予告が掲載されている。ますます伝統をつなぐ水明にエールを送りたい。

水明通信

あけましておめでとうございます。

横浜　川島　典虎

あけましておめでとうございます。はじめてお便り致します。

何十年も御世話になっておりまして有り難うございます。こんな事を書けばもう永のお別れみたいで嫌な感じがするので気がすすみませんが、もう九十一歳になりました。自分でも驚いています。もう少し頑張ろうと思います。

お手数をお掛けしますがよろしく御願い申し上げます。

若狭　飛永　鼓

新年おめでとうございます。

今年もよろしくお願い致します。

雪の多い若狭も今年は一回も雪を見ず少しがっかりした正月でした。

私事ですが、雪のない畑でかぶらの出荷と漬物の出荷、弁当の注文に忙しくしております。

水明忌のご案内

日　時　令和２年２月23日（日）

午前10時受付　11時投句締切　12時開会

会　場　さいたま市民会館うらわ１Ｆ　101集会室

さいたま市浦和区仲町２－10－22　電話048-822-7101

投　句　２句　梅一切、当季雑詠（梅二句可、雑詠二句は不可）

会　費　5, 000円（昼食・お茶・懇親会費を含む）

2, 000円（句会のみ）（昼食・お茶を含む）

懇親会　句会終了後、同会場にて開催、５時終宴予定

申　込　参加費を添えて２月17日迄発行所総務部まで

行事部

俳句

2月号予告

1月25日発売

予価（本体945円＋税）

特別作品　池田澄子・星野高士・若井新一

大特集

名句で解決！

悩み別作句法

▼「分からない」が「分かる」に変わった瞬間

……今井 聖・照井 翠・関 悦史

季語が動くと言われる／「写生句」が「説明句」になってしまう／飛躍がうまくいかない／吟行に行けない場合は？　ほか

特別対談　宇多喜代子×馬場あき子

新連載　愛と死の名句……恩田侑布子

付録　季寄せを兼ねた俳句手帖　春

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　0570-002-301（ナビダイヤル）　https://www.kadokawa.co.jp/

令和２年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15句（表題を付す） 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締　　切	令和２年２月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（７名）

山本鬼之介　山中　順子　星野　和葉
茂木　和子　境　延昭　五明　昇
網野　月を

新珠賞推選委員（６名）

宇田　白鷺　大橋　廸代　大村　節代
小林萬二郎　椎野美代子　波多野寿子

春の吟行会のご案内

日　　時　令和２年３月 31 日（火）

会　　場　本所地域プラザBIG SHIP　東京都墨田区本所１丁目13番４号
電話　03－6658－4601　FAX　03－6658－4613

受付開始　10 時

句会開始　13 時

投　　句　嘱目（当季）２句　締切　12 時

会　　費　2,000 円（句会のみ・昼食、お茶を含む）
5,000 円（句会と懇親会費を含む）

申　　込　３月10日までに会費を添えて発行所総務部までお申込下さい。

吟行場所　○隅田川　○両国周辺　○安田庭園（無料）　○横網町公園（東京都慰霊堂）　○下町散策
春の隅田川の風情、そこに架かる名橋の趣き、各吟行地の桜をお楽しみ下さい。
尚、地図は受付の際お渡し致します。

アクセス　○ＪＲ御徒町北口下車→東京都バス（錦糸町行き）
本所１丁目下車→バス停より１分で会場
○都営浅草線・大江戸線｛蔵前｝駅より徒歩８分。
○東京メトロ「浅草」駅より 12 分
☆大勢の方のご参加をお待ちしております。

主管「第２例会」　主催「行事部」

風　声

○**現代俳句**十二月号―「現代俳句の風」欄

病窓より今日も初冬の富士玲瓏　**河原叔子**

紅茸や毒とはかくも美しき　**町野広子**

銀箔の昼月ふはり冬菜畑　**丸山マスミ**

○**天塚**（宮谷昌代主宰）十一月号―「珠玉一句」欄

祇園会や女ひと言「好かんたこ」　**鬼之介**

○**草笛**（太田土男主宰）十二月号―「受贈誌一詠」欄

月鉾に月が応ふる街の辻　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十二月号―「受贈誌美術館」欄

散り初むる萩を片方の冠木門　**鬼之介**

○**幻**（西谷剛周主宰）十一月号―「受贈誌拝見」欄

祇園会や女ひと言「好かんたこ」　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）十二月号―「受贈誌の一句」欄

母に見え父には見えぬ日雷　**正木萬蝶**

○**新月**（松田碧霞主宰）十一月号―「受贈俳誌紹介」欄

葉柳に召され妙なる夜の景　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）十二月号―「受贈俳誌紹介」欄

誰がための挙手の礼かな秋の海　**鬼之介**

○**太陽**（柴田南海子主宰）十一月号―「一誌一耀」欄

月鉾に月が応ふる街の辻　**鬼之介**

○**太陽**（柴田南海子主宰）十二月号―「一誌一耀」欄

惜別の車窓の頬よ夜の秋　**鬼之介**

○**獺祭**（本田攝子主宰）十一月号―「受贈俳誌鑑賞」欄で粟村勝美氏が『水明』九月号を鑑賞。

○**獺祭**（本田攝子主宰）十二月号―「受贈句集紹介」欄で鈴木多津子氏が**五明昇**の第二句集『道草』を鑑賞。

○**天穹**（屋内修一主宰）十二月号―「主宰句紹介」欄

誰がための挙手の礼かな秋の海　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十一月号―「諸家近詠」欄

物干し台は今も健在星涼し　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十二月号―「諸家近詠」欄

近松の芝居がはねて十三夜　**鬼之介**

○**鳰の子**（柴田多鶴子主宰）十二月・一月号―「受贈俳誌御礼」欄

惜別の車窓の頬よ夜の秋　**鬼之介**

○**山彦**（河村正浩主宰）十一月号―「諸家近詠」欄

瑞兆の五代の空よ水明忌　**鬼之介**

○**わおん**（野本希容資主宰）十二月号―「受贈誌拝謝」欄

行きつけの来来軒の秋灯　**鬼之介**

（五明昇抄出）

水明発展基金御礼

（敬称略）

―十二月末日現在―

小林萬二郎	10口	吉住　光弥	10口
栢尾さく子	20口	臼井　由美	5口
西山貴美子	10口	水野　興二	2口
加藤草太郎	30口	菊池ひろこ	10口
日髙　徹	5口	渋谷きいち	3口
川島　典虎	3口	櫻井よし江	10口
加藤でん治	3口	越田　栄子	5口
森　千代子	10口	井関　礼子	10口
下川　光子	5口		

―合計　151口―

水明発展基金募集のお願い

水明俳句会会員の皆様には、平素より会の運営に関し、格別のご理解・ご協力を賜り、ありがとうございます。

水明俳句会は、会員の皆様からの温いご支援の賜である「水明発展基金」によりまして、何とか俳句会の維持・運営を致しております。

つきましては、時節柄、出費のかさむ折とは思いますが、「発展基金」に重ねてご協力頂きたくお願い申し上げます。

なお、水明俳句会の運営は、常任幹事会を中心に、経費の節減に最大限の努力を致しておりますが、会員数の減少による収入減を補うのは難しく、発展基金からの支援で賄っております。

また、本年六月には「水明創刊九十周年」の記念祝賀会を兼ねた全国大会が催されます。歴史と伝統のある俳句結社「水明」を継続させるために、会員の皆様には、発展基金へのさらなるご協力をよろしくお願い申し上げます。

水明俳句会　主宰
水明発展基金会長　山本鬼之介

後記

昨年の新春俳句大会は光二前主宰の喪中のため遠慮申し上げた。今年の新春俳句大会は、早くも令和二年である。水明誌に御案内した結果、五十一名のご参加を頂き有意義な大会になった。

暖冬のため、冬野菜が安くてありがたい。しかし日本の四季は確実にやって来て欲しいと思う。今頃は霜柱を踏んで、泥んこ道を歩いたものであった。こんな冬を迎えると、夏の大雨や台風の被害が心配になる。静かな一年であって貰いたいと心から願っている。

また今年はインフルエンザだけでなく、中国から新型コロナウィルスによる肺炎が確認され、恐怖である。なるべく人混みへ出かけない様にと医者は言う。特に子供と高齢者は気をつけて……。

二月の水明忌は、今までは如月忌として修していたが、それに準じる忌です。どうぞ皆様こぞってご参加下さる様、お願いします。

（順子）

毎朝今日一日の天気予報を伝える桧山さんのお話があると云うのでNHK文化講座に申し込みをした。桧山さんは、大学を卒業後更めて予報士になる為の専門の学校へ入り資格取得し同時に関連資格として防災士の資格も取られたとの事。天気を予報するにはまず日本に影響を与えそうな所の雲の発生具合、風の位置それに伴うその流れの方向性などが綿密に計算されて発表するので途中急に流れが変ってしまうと大変に。

ここで雲による天気予報。

雲なし、快晴。雲一割、晴。雲五割日射し無、晴。雲九割日射し有、曇。飛行機雲、天気下り坂等等。

「予報はどうして出来るのか」の質問には、沢山の観察経験、その他色々の経験の積み重ね、人生と同じです」と締め括られた。天気予報を信ずるには、一番信頼出来るキャスターを見つけその人の解説を良く聞く事だそうですよ。私は絶対桧山さん。有難う。

（和子）

「西向く侍」「二四六九士」子供の頃、十二ヶ月の内の「小」の月を覚えるのに良く使ったものだ。ところで今年は閏年である。四年に一度二月が二九日まである。「小」の月に変わりはないが「この日に生まれたら年をとらなくていいね」なんて話のたねにもなったものだ。が、これに当てはまる人が近い所にいらしたのに驚く。出生届はどうなっているのか聞いてみたい。

閏年とは、地球が太陽を一周するのに三六五日五時四八分四六秒かかる。そこで太陽暦ではその端数を積んで四年に一度、二月の日数を二九日にして合わせているのである。二月二九日は「閏日」と呼ばれる。

今、盛り上がっているオリンピック・パラリンピック、第一回は一八九六年アテネで行われたが、たまたま閏年に開催されたため、以後ずっとオリンピックは、四年に一度の閏年に開かれているのだという。なーるほど。

（和葉）

水明

令和二年二月号
通巻一〇七三号
令和二年二月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

職業

年齢

水明集

五月号　二月二十五日締切

都市又は府県名	氏　名（俳　号）

きりとりせん

季音抄

山本　鬼之介

葛湯飲む胸の間へのとれるまで　吉住　光弥
初霜や西郷さんに鳩の糞　網野　月を
野良猫の意地の一瞥冬の路地　石井　喜恵
近松忌奥の間といふ開かずの間　石山かつ子
ぽん引きの過去をさばさば褄の主　大橋　廸代
どの路地にも闇のかぶさる冬の朝　大村　節代
迷ひ込む粋な路地裏寒椿　柚木　治子
笑む妻に名古屋饂飩や十二月　宇田　白鷺
道しるべなき径行くや枯柳　小倉　倭子
男坂下れば神田年の市　松本　光子
若冲の鶏の雄叫び散紅葉　森本　早苗
裏木戸に石蕗の明かりの昏れ残る　丸山マスミ
葱の青一直線の畝に立つ　松宮　保人
近松忌師の菩提寺に比翼塚　梅澤　佐江
自動ドア開き枯葉が先に入る　矢島　清
手袋を脱がぬまま読む置手紙　大場　順子
裏山の竹に添ひ寝の寒椿　原田　想子
歳の市果てて小さきつむじ風　松井由紀子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明　令和二年二月一日発行　毎月一日発行

水明抄

山本　鬼之介

帰り花米寿の叔母のハイヒール　野田　静香
ゐざり機響く里村小六月　大塚　茂子
立冬やスカイツリーの影の街　日髙　徹
鎚音の絶えて久しき鍛冶祭　青木　鶴城
薪割りの斧にぽつりと初時雨　渋谷きいち
小春日や筒音しのび田原坂　近藤　徹平
露寒や奸婦の塚を労りぬ　正木　萬蝶
糸底に淀みたる陰露寒し　曲淵　徹雄
竹籠を編む指太し秋の昼　保坂　翔太
大根やばつさり切れぬ縁あり　河野はるみ
今日の陽に総身ゆだぬる干布団　宮﨑チアキ
野仏のおん手に遊ぶ桐一葉　神田　治江
古地図手にめぐる本郷小春空　染谷　正信
甦る力を残し枯木立　熊倉千重子
対岸の藁焼くけむり冬めきぬ　新　暦文
遡る川の源流冬日和　越田　栄子
小町針そのままにして暮早し　原田　秀子
覗き見る財布の中身一葉忌　加藤でん治

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

（第九十三巻　第二号）　定価　一〇〇〇円